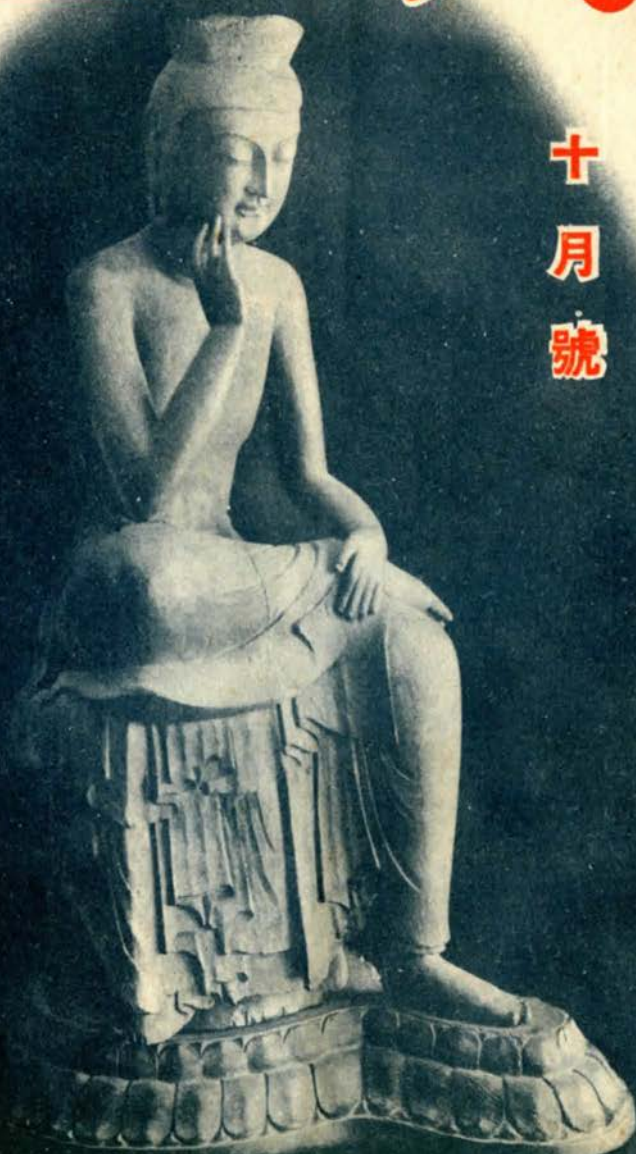


土 淨

十月號



昭和十五年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年九月廿日印刷本

第六卷 第十號

陸海軍病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に六千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇ 全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇ 一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇ 毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇ 個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇ 御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

新發賣

一日二球で健康量

理研製品



肝油を精製した
純ビタミンA D

肝油が効くのはビタミンAとDの爲だと判つてゐる今日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はありません。本品は肝油から精製抽出したビタミンAとDを無味無臭のグロビュール球に収めた快適な製品——肝油の効果は完全に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

新製理研ビタミン球は、最近のビタミン學說に據り、一日二球づゝ服めば完全に生理的健全量を満たせる様に、一球ビタミンA五千D一千國際單位を含有させた製品。しかも豆粒ほどの小粒です。

一月量 六〇球 二一圓

總代理店
株式会社
王露商店
電話東京七番

品切の節は總代理店へ

理研 ビタミンA D 球

淨土十月號 目次

表紙

扉・目次繪

廣隆寺觀音像

米倉隆從

支那に於ける

信念生活の一斷面

山口察常(六)

高原靜秋

吉田絃二郎(一六)

身邊雜話

臥心二つ三つ

金田明進(四)

隨筆 亡き母の年まで生きて

竹内一(五)

生命の大道

梅原眞隆(六)

實話 從軍僧

中野隆雄(三)

信

仰

相

談

中村辨康(四)





短篇

汽車の中……………吉野翠幹（二〇）

小どもの夢……………小林 一（二五）

法然上人 和歌註解……………安西覺承（三）

鎌倉大佛雜談……………佐藤密雄（四〇）

心經講義 夢も見じ酔ひもせじ……………中村辨康（五）

自己を見つめて……………大森 藤吉（五） お十夜のいはれ……………（二〇）

本尊の坐像に就いて……………中村 辨康（三） 會のこと會員のこと……………（五）

歌壇……………與謝野晶子選（三） 支部擴大の願ひ……………（一五）

俳壇……………太田耳動子選（四） 編輯後記……………（五）

【廣 告】

揮毫部の開設

御利用下さる

法然上人遺仰會 入主 鑄印 部 高 揮

法然上人遺仰會で取次をする揮毫部を開設いたしました。揮毫部は皆さんの御希望で何でもお需めに應じます。例へば會社商店等の一寸した招牌(小包郵便で送れる程度のもの)標札、門票の類、墓碑(こ

れは寸法と願稿さへお送り下さいば宜しい)碑文(これも同様)印刷用ボスターの文字等を揮毫いた

皇老東漸慧成弘覺慈教明照

します。別項御一覽の上精々お申込下さい。

揮毫部の擔當は當分

小橋麟瑞氏

をお願ひします。同氏は此方面に多年の經驗を有せられ、その書風は一家獨特の境地を開いて居られますから充分御期待に副ひ得ることを確信いたします。書體は篆書、隸書、楷書、行書、草書の五體ともお希望に應じます。適宜お任せ下されば猶結構です。

取扱概要

- (種目、材料、揮毫料)
- 一 墓碑銘、紙面、五圓以上
- 一 碑文、同、參拾圓以上

- 一 門標、木材、壹圓(用材無料提供但し材質御註文の方は用材をお送り下さい)
- 一 招牌、同、拾圓(長さ三尺二寸迄)

- 一 其他石版摺拔歩狀(コロン紙)印刷用ボスター類の文字
- ◇ 右の内墓碑揮毫は大體碑面二尺二寸程度を標準とします。
- ◇ 墓碑の側面に連刻する関係文は一字五錢の割合でいただきます。

會員各位に御利用を願ひます

碑文は大體墓碑関係文の倍額として計算します。

◇ 門標は氏名と住所を別々に御希望の向は二枚分とし、一枚に氏名又は氏名住所併記は一枚分として取扱ひます。(前金お申込に限り) ◇ 招牌は小包郵便で取扱ひ大きさを限度とし材料を御送附の方に限りお取扱ひいたします。料金を前以て決定し難いものは代金引換郵便を利用します。

◇ 本會會員に限り特に二割引。御拂込は本誌挿入の振替用紙を御利用下さい。 ◇ 詳細は法然上人遺仰會内揮毫取次部宛照會のこと (凸版は小橋麟瑞氏の筆跡)

淨土十月號

念佛は様なきをやうとす。たゞひら
に佛語を信じて念佛すれば往生する
なり。

法然上人御法語





支那に於ける

信念生活の一断面

山口 察 常

信念に生きる生活

支那人には一般に宗教的な信仰を有つて居るものが少いやうに見える。そして如何にも現世的で實利主義で、信仰生活などいふ奥深いものもあり得ないやに思はれる。しかしながら彼等のすべては決して唯漠然とその日を送つて居るといふのみではなく彼等のうちには何等か一種の堅い信念を潜め有つて居るものがあるのである。

元來人間は唯自然の求めるまゝの欲望を満足するといふことだけでは生きて行かれない。自然の求める欲望は、肉體を養ふ爲の物資があれば足りるのであるが、それが豊富にあるから、それで十全な生活とは謂はれない。假令物資が豊富に備はつて居ても、絶えず苦慮を懷いてその日を過すものもあれば、又物資が恵まれて居ない、しがたい生活のうちに、晴れやかな氣持で世を渡るものもあるのである。畢竟足るを知るとか、分に安んずるとか、讀書人ならばそれ相應に所謂安心の生活にも入られるであらうが、何等目に一丁字なき人々にも、ともすれば



かうした落ちつきのある生活に安んじて居るものがあるのである。それは何か知らん信念といふ據りどころがあつて、よく平然として居られるのであらう。

晏如たる乞丐の生活

北京には乞丐の多いことが一つの名高い情景である。明の謝肇淪の著した五雜俎を見ても「京師乞丐商賈より多し」とある。今も各所の廟會には、必ず無數の乞丐があつて、行人の前後左右に群がり、或は額づき、或は跪き、唯哀願に努めて居る。襤褸を纏うて居るが、中には半裸跣足、實に惨めな姿のものもある。

彼等は決して好んで乞丐たるに甘んじて居るのではないが、人が苦力にでもなつたらと勸めても、彼等は斷じて之を肯んじない。その乞丐の生活に晏如として居る。

往時は彼等呼んで頂沙鍋と名づけた。それは鍋を捧げて食を乞ひ、食し了ればこれを頭上に戴いて

平氣である。蓋し手に持つことさへ厭はしいのである。前清時代冬十月一日から彼等に粥の施行が始まる。

早天之を受けて腹を滿せば、また隨處に横臥して平然たるものである。偶衣服の施恵に遭へば、喜んで之を受けるが、直に典して飲むなり博奕なりに費して願みない。

その生活を以て患としない所、如何にも分に安んずる者とも謂ふべきである。我が國の俗諺にも「三日乞食すれば止められない」とある。それに彼の國では、乞丐は苦力よりも地位が高いとされてある。いや一般の傭兵よりも上に位するものとされて居るのである。

蓋し乞丐となるには決して求めてなるのではなく家運の顛落とか、官役の失脚とか、何れにしても止み難い事情から來るので、人の同情を惹き易いからであらう。

だから當人もその乞丐なるに安んじて、敢て苦力にまではと考へて居るのである。



乞巧に不義不正なし

乞巧の生活は外から見れば、固より悲惨なものに過ぎないが、當人の斯く晏如として居られるといふには、何かしら信する所があるものゝ如くである。即ち彼等はその處世について百計盡き萬策の施しよなく、つゝに乞巧の群に投ずるので、所謂「沒有法子」である。「沒有法子」とは致方がない、運命である。諦めの外ないといふのである。

此處に一種の信仰生活が生れて来る。「人事を盡して天命を俟つ」といふ姿である。そこには何となく尊いものがある。紫綃絢爛、脂粉靨郁としては居ても、不信を懷き、不義を裏んで居ては、何の榮華であらう何の人世であらう。

吾々は乞巧の生活を望むものではない。しかしよくその晏如たる姿に對し、自ら省みて感慨なきを得ないのである。彼等は食を乞ひ錢をこそ求めるが、決して不義不正を働かない。のみならず中には世に

も稀な善事を爲して居るものさへあるのである。

天命に安んじる信念

京師偶記に乞巧の一篇行が掲げられてある。それは北京に蔡某といふ乞巧があつた。常に半裸の姿で、食物も勿論足らぬ勝であつたが極めて淡々たるものであつた。嘗て途中で七十金を拾ひ、日々之を懷にして、遺し主を求め歩いたが見當らなかつた。そこで或る個所にそれを埋めて印しをしておいた。

それから數ヶ月の後偶夫婦のもの二人が對座して泣きぐづれて居るのに遭ひ、よく見ると平生物を恵まれた家の二人と分つたので、立ち寄つて様子を尋ねて見た。その夫婦はある富豪から金を借りたところが、家産を盡しても拂ひきれず、一女を賣つてもまだ足らず、竟に官に訴へられ、將に刑に就かんとする所であつたのである。

之を聞いた蔡某は直に埋めておいた七十金を掘出し、その富豪を尋ねて懇々と、夫婦の急を告げ、



且「もし夫婦のものが死にでもしたら、貴方は天道をどうしますか」と謂ひ、「これで全部を償つて下さい」と、かの七十金をさし出した。富豪もその義侠に感じ、その中の五十金を取つて、前借を棒引にしてしまつた。蔡某は二十金のうち、五金を以て、夫婦の一女を贖ひ、十五金を以て木綿幾反を買ひ、乞丐仲間に施してしまつたといふことである。

この一齣話の如きは、眞に天命に安んずる乞丐其人の面目を表はすものではないか。これが信念生活でなくて何であらう。

生 活 信 念 生 活

吾人は決して乞丐を懲罰するものではない。

乞丐としても尙この信念に安んじた生活をなし、義俠常人も及ばないことを敢て爲して居る所に深く感ずるものである。苟も信仰の生活を送る者としては、この乞丐に劣つてはならないではないか。

とてもかくてもこの世には

思ひわすらふことぞなき

といふ心境にあるべきものゝ、却て世に多く係累を持ち、「心の間はよいから答へむ」と、わが心に愧づるやうでは、到底人を導き人の上には立ち難い。あらゆる智識を棄て、愚痴に返へれと教へられたほどである。名譽を希ひ、富貴を希て、物欲に憧れて居て、何の信念が生れよう。

斯様な乞丐生活の高逸な例は我が國にも決して少くはないであらう。

唯如何にも現實主義な、利己のみに走るが如く思はれて居る支那に於ても、かうした生活の一斷面の存することを忘れてはならない。

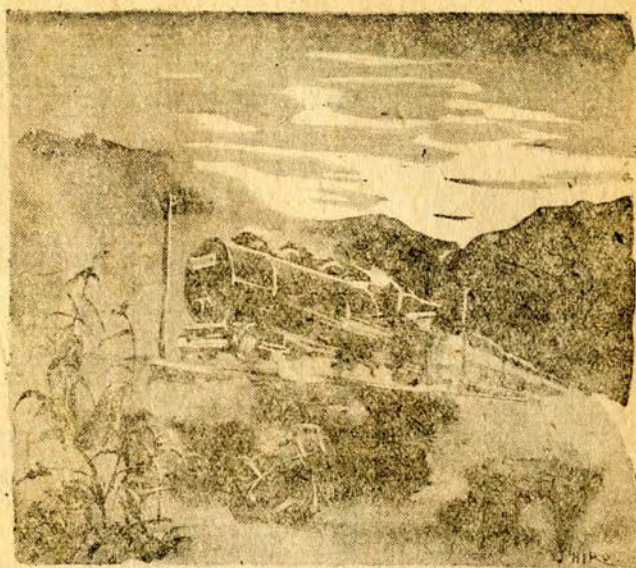
信念に生きるといふことは、生きることが先きではない。

信念があつて始めて生きるもので、信念さへあれば、乞丐の生活も尙よく晏如として居られる。そこに無限の尊さがある。

偶京師偶記を繙いて感想を記したまでである。

(筆者は大正大學、北京大學教授、文學博士)

網棚の荷物



さつきまで人を押したり、押されたりしながら夢中になつて自分の身體を前に／＼進めてゐたので、列車が発車しても未だ興奮から

「今夜のやうな混雑は全く初めてのことですよ。私はこの線に何十回も往復してゐるのですがね……」
と、私の前に席をとつた中年の男が、如何にも旅には慣れてゐるといふやうに私に話した。

さめきらなかつた。ほてつた顔
を風にあてながら、私は窓を開
けてキラ／＼瞬く大空の星を眺
めてゐた。眞闇な大きな穴につ
き進んでゆくやうな夜汽車の中
では、誰も彼もが顔を赤らめて
怒つてゐるやうに思はれ
た。

汽車の中

念佛唱えぬ

—— 不幸な人々 ——

かけて來た。全く今夜のやうな騒ぎは、混雑
したと云ふだけでなく、何かしら悲惨なもの
に感ぜられた位であつた。青年團や少年團の
人々が、人の渡の中に立つて怒鳴り叱咤しな
がら整理してゐた。その中で女子供の押し
つぶされるやうな金切聲が未だ耳に残つてゐ
て、彼等の歪んだ顔が見えるやうであつた。
彼等はうまくこの汽車に乗れたであらうか、
乗れても座席がなくて立つてゐるのでないだ
らうか等と氣になつた。
やがて列車は次の停車場で停つた。そこで
は降りる人が一人もなく、狭いデッキから
次々と流れ込むやうに大小の荷物を持つた乗

客が入つて来た。私はこの人々の顔をみながら、一體何うなることかと心配になつて来た。

そんなことに頓着なしで、間もなく列車は重たさうに走り出した。こんな際には人々は可成り無遠慮になるらしい。座席がないので、総つたやうに、他人の荷物を勝手に動かしながら、網棚の上に荷物をのせてゐた。私の荷物の中には瀬戸物の土壺が入つてゐるので、壊されては大変だとビク／＼しながら、彼等の仕草を眺めてゐた。

列車が曲線にかゝつて大きく揺れた。その揺れに網棚の一番上にのつてゐたトランクが落ちて、前に坐つてゐる男の頭をしたゝか打つた。トランクの持主は平氣な顔で再び網棚にあげて置く一つ云ふでもなかつた。

まるでトランクの下に坐つてゐる者が悪いのか、列車の揺れたのが悪いのだといふやうであつた。周りの人達もこれを見てゐ

て、何も云はなかつた。興味のない他事を眺めてゐるかのやうに何んの感興もないらし



つた。

私は四圍の空氣が餘りに不自然なので笑ひ

たいやうな、怒りたいやうな諷刺の解らぬ氣持になつた。前の男は痛さうに顔をしかめたり、ブツ／＼云ひながら網棚を見上げたりしてゐた。私は頭が疲れ、こんな重たい氣持に耐えられなくて、睡くはないが、坐り直して眼をつぶつてしまつた。

人の子

やがて列車はまた次の驛で停つた。前と同じやうな乗客の混雑が繰返された。

「何だ、子供らしくもねえ、お互ひ様だ。」

私の後の方で、かうどなり立てゝゐる商人風の男があつた。何んのことか意味が判らぬので私は振り向いてみた。するとその商人風の男が母子で坐つてゐる席に、自分の子供を押し込んで坐らせようといふのであつた。

すると先の子供が新しい侵入者を防ぐかのやうに後の子供をいれまいとしたので、商人風の父親が怒り出したわけである。いくら女でも自分の子供が、見ず知らずの男からだなられては黙つてゐなかつた。

「子供なんですから、おだやかに云つて下さい。この子は氣が小さいのですからね。そんな大きな手で押す人がありますから。」

「お互ひ様だよ、全く子供らしくもない。譲り合ふのが當り前だといふのに、意地悪することもないだらう。」

「そんなら他の車に行つて探していraftしやい。」

父親と母親とが各々自分の子供のために、奮然立てていがみ合ひ、何れも敗けてはいなかつた。周囲の人達は、何うなることかと氣

になつて、出来ることなら父親の方に加勢してやりたい氣持であつた。汽車の動揺と雑音に妨げられて、すぐには中に入る人もなかつた。今度は母親の方が何か大聲で云はうとした時、氣の小さいといふ父親の方の子供が「ワッ。」と泣き出した。



それまでその隣りで知らぬ振りをして本を讀んでゐた洋服の男が初めて口を出した。

「あなたはもつと溫和しくしなさい。子供相手に大騒がてゐる。」

「お前さんはおやぢさんかね。」

「いえ、他人です。しかしあなたの仕事に餘りしどい。」

「大きなお世話です。混んでゐる時にはね、思ひやりがなくてはいけませんよ、思ひやりが、いくら小供でもやり方があんです。」
とうとう喧嘩が男同士になつてしまつた。

高い聲と低い聲とがしきりに口論してゐたが、子供の方で親の喧嘩に愛想が盡きたか、親の物を引つぱりながら、

「お父さん、お父さん、僕ちつとも腰抜けたくないよ。」

と云つた。

親の喧嘩に子供が出たといふ形になつて、この一言で落着いてしまつた。男親はそこに居たたまれなくなつて、急ぎ後の雑の方歩いて行つた。子供は親にグン／＼手を引かれ、車の動揺でフラつく姿が、私達には耐えられなく可哀想に思はれた。

自分とは別だ

夜が更けるに従つて列車の中は段々に静かになつた。大部分の人は勝手な行儀の悪い姿勢になつて睡つてゐた。車輪の響は私達の耳に慣れてしまつて、逆つて車輪の音が止むと目が醒め、人気がない停車場をねげ眼でみたりするのであつた。

その内に私もウト／＼したらしい。大きな

聲でわめいてゐるのに目を覺した。身なりの相當立派な男が演説めいた口調でどなつてゐた。どうして又今夜の晩車はこう事件が突發するのだらうかと思ひになつた。こんな夜更けてまで騒ぎがあつてはやり切れないと思ひながら、私も聞き耳をたてた。

「諸君、今まさに産めよ殖せよの時代である。女達のために席を譲つてくれ給ひ、男なんぞは立つてゐても平氣である。いや平氣でなければいかん。男はみんな立て、立たないか。」

何うやらその男は酒に酔つてゐる様子であつた。男の後には何れも同じ年頃と思はれる若い女達が通路一杯に立つてゐて、幾人ゐるのか終りが見えぬので判らなかつた。

「長期戦に備へる日本人が、弱い女をいたわ



らぬやうで何うするか。それそこにあるお前なぞ立つたら何うだね、ねえ君……」

その男の口調は全くふざけたものだつた。

誰一人相手にしてくれる者もないので、その男は廻りボソクサ云ひながら次の車の方に歩いて行つた。すつかりそれ等一團が去つてしまふと、二、三人の乗客が一度に席を立つて便所に行つた。實は私もさつきから便所に立ちたかつたのだが、それ幸ひとあの男に席をとられはしまいかと心配になつて嫌だつたし、席を譲るのは尚更嫌なので、小用を我慢

してゐたわけだつた。内心では弱い女達に席を譲つてもよいといふ氣もないではなかつたが、男の口調が氣障だつたので、身遠かされるやうに思つて知らぬ顔をしてゐた。

しかしフト氣がつくと隣の車で、四人の學生が一隣に三人座り、二人の女に席を譲つてやつたのに氣がついて、一寸救はれたやうな氣がした。すつかり睡りを覺されて、しばらく賑やかに雑談の聞えた車内が復もとの静けさにもどらうとした時に、一人の青年が隣に戻つて来て、四圍に聞えるやうな聲で語し始めた。自然と私の耳にも語が聞えて來た。

その話によると、先般車内で女に席を譲れどなつた男が二等車に入るのを見たので一縱に入つてゆくと、二等車にもぐり込んだといふのであつた。そこでその青年が腰を立て、その男を呼び出したところ喧嘩になつてしまひ、結局幾つか殴つてやつたといふことであつた。

私はこの青年の話を聞いてウンザリしてしまつた。多少なりともあの男の云ひ草につい

て考へたことが後悔されて、醒されたやうな腹立たしさを憶えた。自分だけは別だといふやうに考へる者こそ最も許せないものだと思へて不快になつた。「旅は恥のかき捨て」といふ言葉位は言葉はない。樂しがるべき旅をお互に不愉快にしあふのは汽車の中の場合が多い。

朝の空氣

列車は走りにつて、漸く闇の世界を通り抜けようとしてゐた最早車輪の響は耳にも入らない。東の空がはけでいたやうに薄く明るくなつて來た。

列車の中では夜の明けかけたのを知らないで、昨夜の姿のままで眠つてゐる人が多かつた。すつかり汚れ切つてドンヨリしてゐる空氣から逃れようと思つて、私はデッキに出て外を眺めた。

騒々しい一夜の汽車の旅であつた。十數年住み慣れた東京の空が、目では見られない遙か遠くになつてしまつた。果して再びあの塵

で汚れた東京の天空を眺めることがあらうかと考へると、初めて遠方に來たといふ實感がして、逆に故郷に近づいた懷しさが胸に浸みて來た。何んの奇もない山や森も、久し振りで見た自分の家のやうに思はれた。

薄曇で描いたやうな山かげから太陽が昇り始めて、段々と紫や紅に染められて來る大空に向つて光芒がさつと放たれ、類一類金色が強くなつて來た。私は闇を征服して熾々と照り出した太陽の光りを眺めて、云ひ知れぬ歡喜を憶えた。

偉大なるものは太陽の光である、今更ながら感嘆せずにはゐられなかつた。何處眺めても、それまでは忘れでもしてゐたやうに、新たなものを感ずる。古代のギリシヤ人は金色の馬が火と燃ゆる金色の車を引いて馳けりと物語り、吠陀時代の印度の人は或ひに畏怖し、或ひは歡喜して讃ひ歌つた。これはあだかも阿彌陀さまの無量の光と同じことである。こんなことを思ひ浮べながら、私は朝の光を浴びて、不自然なもの、汚れたもの、總

ての惡が氷解せずにはゐられない偉大なものをしみ／＼味つた。

狭ひ車の中で昨夜から怒つたり、喧嘩したり、お互ひに不愉快に思ひ合つた人々もこの朝の光を浴びて懺悔せずにはゐられないだらうと思つた。

愚人の姿、痴人の姿に氣がついて、直しても直しても逆もどりしてしまふのが、私達のほんとの姿である。私はあらためて合掌し、南無阿彌陀佛と十念した。やつとのことで昨夜の暗い氣持を洗ひ落したやうな氣がした。御十念によつて救はれた氣持であつた。何うにもならぬ自分の姿に重かつた心も軽くなつた。睡不足で痛む頭もホット息をついて、自分の身體の中に大きな力が湧きあがつて來るのを感じた。

車輪の響きで爽かな田舎の空氣をゆるがしながら、汽車は下り坂を風のやうに滑かに走つてゐた。

法然上人鑽仰會

は設立以

來ここに六周年を迎え、その間難
 難發行、圖書出版、講演會開催等
 によつて微力ながら宗祖法然上人
 の御遺訓を普及し、お念佛による
 生活指導に努力して來ましたが、
 宗祖上人の偉大なる御信念はいよ

く芳香を薫じ、漸次社
 會教化と淨土建設にその

實を擧げつゝあるのは、

全く會員證覽の絶大なる

御後援の賜物と深謝して

みます。しかし本會は時

局のますます重大なるに

鑑み、これまでの實績を第一段と

し、新東亜建設のための信念を培

ふ意味から、更に宗祖上人の崇高

なる御人格、信念を宣揚し、徹底

せしめる第二段の活躍に邁進する

こととなりました。

本宗々侶各位には何卒本會

の微意あるところを御諒承下さい
 まして、本會とともに手を握え、
 目的完遂に突進すべく一臂の勢を
 たまはりたく存じます。これまで
 の本會發展の跡をみるのに、各支
 部の御骨折りに依るところが多
 く、中には數百の會員を擁する支

一寺院一支部の確立へ

支部擴大の願ひ

部も幾つかあります。従つて今後
 とも

一寺院一支部を目標として

支部の擴大強化に進まねばなりま

せんが、他方に於ては未だ支部の

設立されてない本宗寺院も多くあ

りますので、是非ともこの際支部

を設立し、宗義宣揚と澱滞たる時
 流を指導するために御協力下さら
 んことを幾重にもお願いいたしま
 す。

尚既にある支部では更に

一層擴充に御配慮下さい、又は親

に支部を設立下さる宗侶證覽

の御參考までに別項支部規約をお
 知らせいたします。

支部規約

一、支部は會員五名以上を集め
 て組織して下さい。

二、難説「淨土」の、配本方法
 には、本部から直接各會員宛に
 お送りする方法と、支部長に括
 めて送り、支部長から各會員に
 頒けて戴く方法とがありますの
 で、何れても御便宜の方を取計
 ひますから御通知下さい。

三、支部は適宜の時機に念佛會
 座談會、講演會等を開催して下
 さい。その節は何かと本部から
 御後援いたしますから御相談下
 さい。

四、支部長は本部と常に連絡願
 ひます。
 (例へば會員の増減、住所變更
 等)

五、その他支部設置についての
 詳細は直接本部にお問合せ下さ
 い。

法然上人鑽仰會



高 原 靜 秋

吉 田 絃 二 郎

今朝は浅間も秋晴れの美しい山肌を見せてゐる。嶺は風が強いのであらう、南の方から白い雲が叩きつけるやうに山にあたつては、碎け散つては北の方へ散つてゆく。

落葉松の中の小徑を歩いてゆけば、雛をつれた雉が俄かに足もとの草むらから飛んでゆくこともある。谷をへだてゝ山鳩の聲が聞えて来る。

雀を追ふ威銃の音が山の死靜を一層深くするやうに、肅なこだまを傳へて来る。

朝ごとにたどる小徑ではあるが、朝ごとに異つた心に映つて来る。落葉松の間に見ゆる浅間も浅間の深も一様に霧につゝまれた朝は山の小徑も暗く、頼りなく思はれる。落葉松の間にかざす浅間の山肌の明るく、

秋の青空に溶け入るかに見ゆる朝は、道の邊に咲く松蟲草までもが爽涼として胸に迫る。

×

山の空は變り易い。信濃高原の雲の色はまことに美しい。その雲の色を仰いで高原の芒原を終日歩いても飽くことはない。しかしその空の色、雲の色も明朗陰翳につれて刹那々に人の心も變つて来る。昔の修行僧たちが高山のいたゞきに立つて、環光に包まれた自分の姿を見て、來迎の佛のお姿であると思つたのも無理はない。高山に登る人々にはその心持ちは想像がつく。

山嶺の環光そのものは物理學的な現象に過ぎないか



も知れぬ。しかしその環光を機縁として、雲と天空の光彩の上に立つかれ自身のその刹那の心はたしかに佛のものに詣する程の淨さと幽玄さを感じてゐるにちがひない。人間の心は機縁によりて佛ともなり、夜叉ともなる。

居は心に移すといふのもこれであらう。深い人生を見るためには、深い人生を生きたるためには、それに必要な居を準備しなければならぬ。古人が高山に獨居思索の聖窟をもとめたのもこの故であらう。

落葉松の中の小徑をたどりながら、わたくしはいろいろなことを思ふ。わたくしにとつて朝の山徑は靜觀靜照の聖窟である。

×

わたくしはかつてその同じ山徑を内村鑑三先生と歩いたこともあつた。内村先生は日本の基督教の叛逆兒であつた。しかしその信仰は鐵の如く堅いものであつた。先生は人類最後の審判を信じ、キリストの復活を確信してをられた。先生は古武士的な風貌と信念とを保持した人であつた。この鐵の如き信仰は幾萬の人を動か

かした。無教會主義の先生が、二三度弟子達にすゝめられて青山の青年會館で日曜説教をつづけられたことがあつた。毎日千五六百の聴衆が集まつて來たが、説教がすんで、みんなが歸つて行つた後を、會館の小使が掃除に行つて見るとあの廣い講堂に一片の紙屑も落ちてゐず、椅子は悉く舉げてあつたといふことを聞いた。

宗教は言ふまでもなく信仰である。燃ゆるが如き信仰の力である。直ちに人の肺腑を貫く力を持つものでなくてはならぬ。

サヴォナローラは伊太利の文藝復興期に於ける大宗教家である。かれは火焙りの刑に處せられて死んだが、その信念は鐵のごとく堅かつた。文藝復興期の伊太利人にとつて神は偶像に過ぎなかつた。かれ等は過去の神を殺し、信仰を踏み臺として、新しい時代を創造した。理性、科學の勝利である。

しかもサヴォナローラが立つて神を説くや、數千の市民たちは堂外に溢れたといふことである。理性、科學萬能の時代に在つても宗教はなほそれ以上の力を内包してゐる。サヴォナローラの信念である。宗教はいかな



る世に在りても、最高最強の生命力である。

×

朝の山徑を歩いてゐる間にわたくしは内村先生が住んでをられた別荘の前に出た。アメリカのコツテジ風な建方の家で山の小屋といった感じのものである。

かつて明治のころアメリカからグラランド將軍が日本を訪ねて來たところ、將軍の宿舎として宇都宮あたりに建てたものださうである。その建物を豊岡あたりの實業家が信州まで運んだものである。

わたくしは半ば草に埋もれたコツテジに立寄つて中を覗いて見た。Kといふ畫伯が縁側に近く佛畫を描いてゐた。K畫伯は日本畫壇の大先輩である。

畫伯はいつも秋になつて、都會の人たちが高原になくなるころを見はからつてこの山莊に來ては雪の降るころまで繪を描くのである。

×

わたくしは縁側に腰を卸して畫伯の示す佛畫を眺めてゐた。

佛畫を描く朝々の畫伯の澄み切つた心持ちは尊いものである。

佛壇の前に坐つてじつと佛の國を想像し、佛の國の姿を如實に觀じようとする氣持は誰も經驗するところである。しかしそれは朝夕わづか三十分か一時間のものである。

畫伯は朝から半日、或は夕暮に至るまで佛畫の筆を執つてゐる。その間畫伯は佛の國に參じてゐるわけである。佛畫三昧の境地である。自分の佛の國に入る居を拵へてゐる生活である。

昔の聖たちはよく自分で佛畫を描き、佛像を刻んでをられるが、やはり同じ心持ちであらう。わたくしもできることなら佛畫を描き、佛さまを刻んで見たいと思ふ。繪を描き、佛さまを刻んでゐる間は人は言葉にわづらはされることもなく、念々たゞ佛を思ひ、佛に近づいてゆくばかりである。興教大師は五年の間無言の行を積まれたさうであるが、わたくしもせめて一日に三十分か一時間、黙々として佛の姿を描き、刻みたいものである。

接直らか地産

新茶は 本場から 静岡から

賣小て値卸

これは便利だ！
日本一お茶の生産地静岡から直接皆様の
お手許へ何んの混り氣のない純良茶を而
も値段は卸値で五百匁（約三斤）以上お
送り申し上げます。尙詳細な案内書は「淨
土」で見た旨御申添の上御請求次第お送
り致します。

案内書送呈

目丁五町富新市岡静
店商郎太新水清

番二二三〇三 京 東
番九八一〇一 屋古名 替振



グランド將軍の山莊を出てふたゝび山の徑を淺間の
方へ歩いて行つた。そのあたりには七八軒の山莊が一
團になつて山の上を占めてゐるが、わたくしは不圖一
軒の別莊の前に立ち止つた。門の傍には山桑が繁つて
ゐた。その主人は數年前内村先生と前後して亡くな
つた。さらにその後ろの別莊でも主人が自殺をし、隣
りの家では夫人が亡くなつた。
そのこの別莊を通り抜けたところに亡くなつた妻の句
碑が建てられてあるので、わたくしは毎朝同じ道をた
どるわけである。

×

わたくしは今朝も妻の句碑の前に立つて考へた。わ
たくしは自分ひとりの悲しみのみを思つてゐる。しか
し誰も彼も同じ悲しみを持つてゐる。人間は餘りに早
く死ぬ。わたくし自身も死なねばならぬ。死は直ぐ近
くまで來てゐる。この利那に佛の姿を見なければなら
ぬ。大死一番といふ言葉は今日この利那でなければなら
ぬ。
谷の山鳩の聲を聴いても、芒の原を吹いてゆく風の
聲を聴いても「死に支度致せ」と響いてゐるやうに
思はれる。
今日この利那わたくしたちは佛を見なければなら
ぬ。

お十夜のいはれ

すがすがしい秋の夜空に聲高々とお念佛を響かせるのがお十夜法要であります。お經文（無量壽經卷下）によれば、十日十夜念佛會を修すれば、他方諸佛の國中で千年以上も善をなすより優れてゐるといはれてゐますが、お十夜はこのお經文によつて行はれるものです。

花園天皇の永享年中に、足利義教の執權平貞經の子に兵庫頭貞國といふ人があつて、常に口稱念佛を唱えてゐるといふ信者でありましたが、この人が眞如堂で三晝夜の念佛を修し、のち勅令によつて七晝夜の念佛を修したのでお十夜の始まりといふことです。

その後、明應四年十月に鎌倉光明寺の觀譽裕崇上人が後土御門天皇の勅旨を奉じて宮中でお十夜を修しました。そして勅許を仰いで光明寺では毎年お十夜を嚴修するといふこと

になりました。當初の内は十日十夜に亘る法要であつたが、その後十月十二日から十五日までの三日三夜の法要に變りました。

このやうにお十夜法要は、勅許を仰いで始められるやうになつたものであり、淨土宗寺院だけが勸修する意義ある法要であります。夏の間暑熱とたたかつて額に汗を流しながら努力したかひがあつて、今年も見事に穀物がみのりました。穀物の一粒々々にも佛さまはちゃんと宿つてゐます。

秋の強い陽を浴び、爽々しい秋の風に吹かれながら畦道を歩いてゆくと、自然と天地萬象に感謝せずにはゐられない氣持になります。お先祖さまにもお禮のためお菓詣りをいたしませう。だがしかし自分自身のこの喜びは、そのまゝお念佛を申さずにはゐられませう。秋になれば各寺院でお十夜法要が始まります。青空とともに澄んだ氣持で強くお念佛を申してみると、腹の中や胸の中にあるものがすつかり淨くすきとほるやうな氣持がします。お十夜は感謝の法要でもありませう。

慰問淨土寄附者芳名

(略敬稱)

- | | | |
|--------|--------------|--------|
| 一圓 | 北海道茅部郡 | 稻念寺 |
| 一圓 | 岐阜縣本巣郡 | 林香寺 |
| 二圓四拾錢 | 朝鮮順原鎭業所内 | 辻亮一 |
| 拾二圓 | 神戶市瀧區篠原南町 | 濱村長平 |
| 一圓二十錢 | 和島縣喜多方町 | 佐藤彌右衛門 |
| 一圓 | 秋田縣落合村 | 根本富美 |
| 一圓 | 大森區堤方町 | 森田武雄 |
| 一圓二十錢 | 福岡市西新町 | 福田倉一 |
| 一圓二十錢 | 大森區大森八丁目 | 伊東新三郎 |
| 一圓二十錢 | 三重縣柿野町南泉寺 | 清水法隆 |
| 二圓 | 朝鮮平安北道軍特館 | 石黒嘉一 |
| 二圓 | 埼玉縣松山町大字松山 | 城恩寺 |
| 一圓二十錢 | 横須賀市深田町三一九 | 山田清六 |
| 一圓 | 鎌倉市材木座 | 稻永實圓 |
| 一圓四十四錢 | 北海道釧路町 | 法圓寺 |
| 二圓四十錢 | 深川區清澄町木曾寺抜 | 長坂基滿壽 |
| 一圓二十錢 | 大阪市天王寺區堀越町二六 | 柳川竹次 |

浄土宗讀本で問題となつた

本尊の坐像立像に就いて

中村 辨 康

「浄土宗讀本」の實踐編第四章「信仰修養に必要なる諸準備」中の二本尊の條下に、來迎佛としてのお姿に就いて、如來の方から働きかけて下さる他方の本義から見て「立像の方がより一層よい譯である」と書いて置きましたところ、其後色々な方々から御注意がありましたので左の如く訂正したいと思います。(三五九頁六行目より以下)

「浄土宗に於ては、阿彌陀佛一尊、または阿彌陀佛及び觀世音菩薩、大勢至菩薩の二菩薩を左右脇士とする三尊佛を本尊として居る。また之れに坐像あり、立像あり、兩手の印相にも定印あり、安慰印ありと云つたやうに色々ある。坐像は浄土にましますお姿であり立像は多く衆生を來迎引接し給ふお姿である。救はれ行

く衆生の心狀からすれば、來迎し給ふ立像の方に一層の親しみが感ぜられ、また苦しみがいやされて安慰された者に取つては、坐像のどつしりしたお姿に、何とも云へないおちつきを感じ得られるものである。」

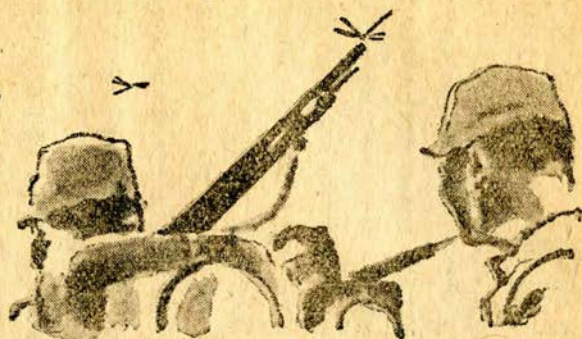
初めあれを書いた當時は、既に正大の石井教授も云はれて居るやうに、私もまた定印の坐像は大體に於いて密教關係の姿であるかの如く思ひ、隨つて來迎引接身を以てより正しいと考へて居たのであつたがその後樵尾博士坂田良弘師等の御注意があつたので、更に考へ直して見ると、坐像必ずしも密教關係のお姿とのみは云へないことが判つたのである。

私達にしても日常に於いて働いて居る時

もありまた深く考へ込んで居るときもありおちついて打ちくつるいで居る時もあつて必ずしも立ち働いて居る時ばかりが正しい姿であるとは斷定しがたいからである。

如來の御働きは、無量壽の生き活くることと共に一方にまた「光明遍照」の十方に光被し給ふこともまた衆生に取つて重要なお働きであつて、その場合、如來のましますところは浄土の中心、七寶莊嚴の寶座が想像されるであらうし、また説法したまふ時は私達人間の日常に顧みて矢張坐つて居られるお姿が想定されるからである。此の故に前記のやうに訂正して置きたい。

尚ほ讀本願讀者に一々申上ぐべきが本意であるけれども、御住所等の判明しない方々も多數あるので、誌上を以て御訂正を願ふ次第である。また諸方から五重相傳、授戒會佛式結婚などの増補を要求されても居り、誤植もあるから、近く訂正増補される計畫もある。それでその分は本文で前の願讀者の御便宜にしたいと思つて居る。



從軍僧

「あれは聯隊のマスコツト!!」

中野隆雄

皆な自分が歩いて居るのか、人に引づられて居るのかわからない、何か目に見えない大きな力に引づられて歩いて居るのだ、丁度つき物のした様に無意識に前へくと足をはこんで居るだけだ。

田の畦を行軍して居ると畦の切目がある、前の兵が「穴だ」と云つて大きく跨ぐと次の兵も又「穴だ」と叫んで跨いで行く、皆な、無意識の内にやつて居る、時たま牛の糞でもあると「穴だ」と言つてまたく、次の兵も「穴だ」と叫んで跨ぐ、誰も牛の糞と氣の付く者もない前の通り「穴だ」と次に注意をあたへて跨いで行く。

こんなに兵士等は疲れて居るのだ、從軍僧

は極端にずんずんと無言で兵士の銃を二打も撃てて先頭を歩いて居る。マラリヤで高熱を出している兵士の銃である、彼はどんな時でも先頭にたつて居た。今では疲れた兵士等は先頭の彼に引づられて居る様だ。

晴れた空に秋のしるしの赤とんぼがすいすいと飛んで、戦地と思はれない風情である、兵士の擔ぐ銃の先に一匹止つて居るが兵士等は誰も氣にもつかないか見様ともしない。夕やみ通つた頃小さい部落に入つた。

「七時迄休止、明日中食までの炊爨せよ」と大休止の命令が出た、兵士等は機械的に炊爨をすすすと二時間後の夜行軍の準備である。

從軍僧は獸々として部隊の先頭を歩いて居た、もう三日も行軍が続いて居る。本道路を適かにはなれた畦道や、山間の驛路を敵の意表に出るべく行軍してゐるのだ。兵士等は戦陣に引續いての行軍にすっかり疲れて居た。

彼處此處で足の手入れが始まつた、多くの兵の中には背囊枕に寝て居る者、兩足をなげ出して空をじつと見つめて何か考へて居る者、背囊の中を整理して居る者等まち／＼だ、兵士達は休止があればきつと持物を整理して捨てゝ行く、長い行軍には何もいらなくなる、大事なたばこも此の様な時は一番先に捨てられるのだ、一戰闘すめばたばこが無くて困るのだが、武器や服まで捨てゝ行かれる支那兵が羨ましい。

○



「從軍僧には佛様がついてらア」とそばに兵器の手入れをしてゐた兵士が言つた。

「貴様には何がついてるのだ、死神か」

「馬鹿、よせやい」

兵士等は元氣に笑つた。一人の兵士が夕日を赤々とあびてやつて來た、笑ひに誘われたのだらう。

「いやに元氣だなア」

昨日軍旗護衛小隊員として本部へ來た兵士なのだ、垢で汚れたキタナイ顔、彼ばつかしではない皆兵士はそうだが響のこひ彼は特によされてきたなく見える。

「おい村上、貴様の顔はどつちが表か裏か」

「ばか、煙草をくわへて居る方が表だい」

皆はどつと笑つた、長い行軍の疲れを吹き飛ばす様に。其處から少し離れたそば煙の煙の道路上に從軍僧は遠く山を見て居た、夕日は長い／＼影を地上に引いて居る、そば煙の向ふは高粱の林が遠く山裾まで續いてゐる、山の方では先程から砲聲が聞えてゐた、いよ／＼明日は敵とぶつかるだらうとぼんやりと山の方をながめ入つて居た。村上一等兵は從軍僧を指して、

「おいちれ、新聞やかい」

「違ふよ、從軍僧殿だ」

「なに坊主か、騒起でもねえ」

數日前新に補充になつた彼は地上に唾を吐いた。

「騒起が悪い所か、從軍僧殿は此の部隊の生きた御守だよ」

「部隊のマスコットか、ちえ、何言つてやがんでい、坊主なんか居るから健達に補充にこなけりやならねんだ」

「戦隊長殿が云ふんだからしようがないよ、健達より此部隊では古いんだ、事變勃發から

この部隊に居るんだからな」

「古からうと新しからうと第一生命を捨てゝる健達には坊主なんか必要ねえよ」

「そんなこと言つて貴様、從軍僧殿に一番先に世話になるんだらう」

「よせやい」

○

其の時そば畑の中の道を山の方から五六名の兵隊が来るのが見えた。

「なんだ、負傷兵かな、おいタンカだぞ」

兵士等は村上一等兵を先頭に從軍僧の立つて居る道路端に馳けて行つた。タンカを擔いだ兵隊は從軍僧の近くで止つた。村上一等兵はタンカ兵に、

「何處でやられたのですか」

「向うの山です、今三大隊が敵にぶつかつて激戦中です」

皆は期せずして「やつた」とほくそ笑んだ、そして負傷兵をのぞいて、

「おい、確かりしろ大した事はないぞ」

「元氣を出せ、元氣でいりやすぐ歸るぞ」等皆で元氣を付けてやつてゐた。負傷兵は、

「有難う、大丈夫だ」と顔を上げた時從軍僧を見た。

「從軍僧殿ですか、もしお名號をお持ちでしたら贈けないでせうか」

從軍僧は内ポケットからお守の名號を出して負傷兵に與へた。

「有難う御座います、これで安心です、もうすぐ歸ります有難うございました」とお名號

を靜かに胸に抱くのであつた。村上一等兵達は何かしら神々しい氣持にうたれた。負傷兵は何度も禮を言ひながら再び第一線に出る事を力強く皆に約しながらタンカに揺られて假懸帶所へさがつて行つた。

○

その翌日部隊は山間の隘路に入つて前進してゐた、山と山との狭間の細い一帯ぐらひの道で右側は小さい瀝れになつてゐる淺い谷川だ、時偶鵲のケムムムといふ囁聲が山にこだまして勇士等を驚かす以外本當に靜かな山間である。丁度路の曲つて居る所に差掛つた時正面の山上から突如敵チエツコ機銃の亂射に會つた、いかにも突然であるので敵の射に掛つた様なものだ、吾々は思様に攻勢に出られない右側の谷川に飛び込んだ兵士等ばかりうじて機銃の應射を始めた、外の半分は山ぎわに粘着するより外にどうする事も出来ない、銃聲は山にこだまして數十倍になつて吾々に覆被つて来る。連絡將校が馬を走らせて後方に飛んだ。後續の第一大隊に連絡の爲だ



らう、後續部隊の到着まで頭張らなくてはならぬ、谷川に入つた兵は必至の應射だ、村上一等兵は昨日手入した機銃で元氣よく撃ちまくつて居る。村上一等兵の隣、輜機がベタと音がしなくなつた、彈藥手が射手を流の中に引おろして居る。

「從軍僧、早く来てくれ」

副官の聲だ、從軍僧は谷川の中に居る副官のそばに彈丸の中を路を縦飛びに飛込んだ、戦死した射手の顔額部から血がふき出して居る、彈藥手は彼を膝に抱へて流の水でふき出す血を洗ひ落してやりながら、

「仇は取つてやるぞ、可愛相になア」と涙を流してゐる。從軍僧は副官と共にすぐやつて来たそして靜かに讀經が初まつた、從軍僧のお經の聲は銃聲の中に切々として又何か力強く響くのであつた、兵士等の胸には期せずして一つの安心が湧き上つた。

「こんな遠い中支の戦場で、而も砲聲彈雨の中で家に居ると同じ様にお經が聞かれるのだ死だつて少しも淋しくもない、佛様が見て居る、御先祖様がついて居て下さる、何んで怖からう、ちつとも怖くも恐くもない」

村上一等兵は泣いて射つてゐた、畏怖の涙ではない感激の涙、よろこびの涙である、日本に生れたよろこび、日本軍人のよろこびを今程感じた事はなかつたのだ。

後方より大隊砲の攻撃が始まつた、もう大丈夫だ、敵は段々逃げだしたのでから先程より銃聲が少くなつて来た、今は山ぎわに粘着た方の兵士も小銃機銃の應射である。

やがて前敵の時が来た、村上一等兵は前方を歩いて居る從軍僧の元氣な姿に何か有難い氣持にうたれ喜々とした眼で見つめるのであつた。

田村辰三畫

（筆者は事變の最初から〇〇部隊從軍僧として各地に活躍し、途中名譽の負傷を受けて入院したが、退院後更に同部隊從軍僧として奮闘し、この程歸還した青年僧である）



生命の大道(下)

梅原眞隆

恵心僧都の示された「往生之業念佛爲本」の見方には在來の聖道諸宗を肯定するだけの餘裕をもつてゐられる。ところが法然上人の標示された「往生之業念佛爲本」には聖道諸宗を根柢から覆へさうとする鋭い批判を藏してゐることとは明白である。

即ちこの「往生之業念佛爲本」といふこと、言葉を換へていへば専修念佛といふことには三重の批判が含まれてゐるのであります。選擇集の末尾には次の如く述べられてゐる。

夫速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に且く聖道門を闔きて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らん

と欲せば、正雜二行の中に、且く諸の雜行を抛て、選んで正行に歸すべし、正行を修せんと欲せば、正助二行の中、猶ほ助業を傍にして、選んで正定を專にすべし。正定の業といふは、即ち是れ佛名を稱するなり、名を稱すれば、必ず生ずることを得。佛の本願に依るが故に、

この一文には三重の選擇が重ねられてゐる。この三重の選擇によつて、「専修念佛」と云ふことが力強くみがき出されるのである。専修念佛といふことは、たゞ念佛せよといふことである。念佛ひとつで救はれるといふことである。念佛は全一の生命道であるといふことである。従つて念佛

以外のすべての法が否定されるらしい批判力をふくんでゐるのであります。そこで専修の二字は恐るべきものとして忌避されるやうになり、法然上人の門下を「専修の黨」とさげすみ、おそれるやうになりました。そは兎に角、三重の選擇すなはち三重の批判は、するどく光つてをります。

第一重の「聖道門」を聞いて、選んで淨土門に入れ」と云ふ選擇は、實に大膽千萬な批判であります。こゝに聖道門とあるは當時の公認された八宗を指すものであり、全教界を内容とするものである。しかるに、この全教界を擱けと宣言されたことは舊教界を根柢から破壊するやうな爆彈的聲明であります。

第二重の「雜行を抛つて正行に入れ」といふ選擇は、これまた、するどい批判であります。そのところには四種類の雜行即ち、持戒と發菩提心と解第一義と讀誦大乘經典が非常に流行して殆んど念佛の行は忘れられてゐたのである。かゝる状態のうちに法然上人は敢然としてあらゆる雜行を抛つて、念佛の正行をとなへよと、おほせられたのである。まことに目の覚めるやうな批判であります。

第三重の「助業を傍にして正定を専らにすべし」といふ

選擇もこれまた徹底せる批判であります。助業といふは、讀誦と觀察と禮拜と讚嘆供養であります。これ等の行業は念佛を資助するものと認められ、念佛をとなへるものに缺くべからざる與件と考へられてゐたのであります。しかるに法然上人はかうした在來の考へ方をはらひのけて、これらの助業を傍にせよとおほせられました。傍にせよといふ言葉は、言葉は寛やかであるが、その内意は擱くといふことと同意語であると親鸞聖人も申されてあります。これらの助業をからすにたゞ念佛することによつて念佛の獨立性がいよいよ鮮明となるのであります。本願の念佛には獨り立ちをさして、助をさしぬ也。」とはこゝに至つて完全に意味づけられるのであります。

思ふに讀誦即ちお經を讀むといふことは知識階級のなしうるところである。觀察即ち淨土に思ひをよせることは有閑階級の試み得るところである。禮拜即ち佛に合掌して生きていることは教養階級の生き方である。また讚嘆とか供養とかいふことは有産階級にしてはじめて爲しうることである。結局助業は知識階級、有閑階級、教養階級、有産階級には望み得る行業であつても貧しい愚かなドン底の凡夫人

には適はしいものではない。佛にお花一本あげる事の出来ない無産者でも佛を拜み淨土を憶れる餘裕のない勞働者でも一文不知の愚かな人々でも念佛することは萬人になし得る所である。こゝに唯念佛一つで救はれるといふ専修念佛の大道が開かれたのであります。かくの如く三重の鋭い批判によつてみがき出された専修念佛の宣明は、在來の既成教派を根本からくつがへさんとする迫力が籠つてをりました。

そこで聖道諸宗の彈劾と迫害とをうけ、深刻な試練の下に立たれることになつたのであります。然も全ての迫害を物ともせず敢然とし批判的に躍進せられたのは法然上人の信念の強さに他ならないのであります。然しこれを以て個人的な性格や思想の強さであると看做すのは認識不足であります。

かゝる鋭い批判はたゞ法然上人の個性の力ではなくそこには法藏菩薩の選擇の批判が光つてゐたのであります。法藏菩薩が南無阿彌陀佛の名號を選び取り一切の諸行を選び捨てられた選擇本願は實に法藏菩薩の批判的精神の現れでありました。法然上人はこの選擇本願の念佛を體得な

されたのであります。果せる哉、法然上人の全き教學は「選擇」の二文字をその核心となされたのであります。

それ故に法然上人の鋭い批判はその儘素直な眞佛弟子の風格でありました。眞の佛弟子といふのは善導大師の釋義によると佛教に隨順し、佛意に隨順し、佛願に隨順する三佛三隨順の風格であります。即ち佛の捨てしめ給ふものをば即ち捨て、佛の行ぜしめ給ふものをば即ち行じ、佛の去らしめ給ふところをば即ち去る素直な態度であつて仰せの儘に生かされて行く床しい姿であります。

法然上人が聖道を擱かれたのも、雜行を抛れたのも又、助業を傍にせられたのもこれ全く素直に法藏菩薩の選擇の批判的精神に従はれたものである、そこで全教界の人達が貶斥しても法藏菩薩の選擇の願心に隨順してゐるといふ信念が金剛不壞の生き方を具現した次第であります。如來と共に生きる者は最も強しといふことが沁々感ぜられます。法然上人の強さは全く佛力によつて生き抜く者の強さであります。

かくの如く唯念佛して救はれるといふ専修念佛の旨趣は如何なるものでありませうか、これに就ては選擇集に明晰

に記されてあります。法然上人は念佛には勝徳と易徳とが具備されてあるから選び取られたのであるとお示し下されてあります。分り易く申しますとこの念佛の中には我等が佛になる全ての功德が完全に具足されてある。然も全ての人の生き方になり切るやうに消化されきつたものであります。

喩へてみますと念佛は母の乳のやうなものであります。

子供にとりましては母の乳ほどすぐれた糧はありません。母の乳の中には子供が生きて伸びる一切の栄養が圓かに具備されてあります。そこで母の乳には副食物を添へる必要がないのであります。砂糖を加へることも鹽を加へることも要しないのであります。これが乳の勝徳であります。然もこの勝れた母の乳は何等の世話も要らずそのまゝうけとることが出来るのであります。母の乳ほど世話の要らぬ糧はありません。耕すことも炊しぐ事も要りませぬ。燗する世話も、冷す世話も要りませぬ。さては茶碗も箸も要らないのであります。端的に飲めばよいのであります。飲む儘が血となり肉となつて子供を生かすのであります。これを母の乳の易徳と云ふべきであります。

念佛は母の乳に等しく最も尊い往生の勝行でありまして然も萬人の保ち易く稱へ易い易行であります。かゝる完全な功德が籠つてゐる爲に法藏菩薩が選擇なされたのであります。法然上人はこの選擇の願心を根柢として専修念佛の淨土宗を獨立せしめられた次第であります。これが爲に法然門下の全ての流派はこの「選擇」の二文字を受け繼いでこれを磨かれるだけ磨き上げ、展開せられるだけ展開して念佛が選擇の願心の結晶であることを見届けたのが法然上人の一流でありました。

この法然上人の批判的精神こそ人生の最も高い指導原理として永久に仰がれるところであります。「本願の念佛には獨り立ちをせさせて助をさゝぬ也」といふ美しい開眼によつて正しい生命道を履踐しなくてはなりません、念佛申す我々はこゝに改めて法然上人に感謝をさゝげねばならないのであります。

親鸞聖人は仰せられました。「親鸞にをきてはたゞ念佛して彌陀に助けられ参らすべし」とよき人の仰せを蒙りて信するほかに別の仔細なき也」と。我等は親鸞聖人の如く素直に仰いで信すべきであります。(筆者は眞宗本願寺派執行)



短篇

小どもの夢

小林 一

一夫ちゃんは生れてはじめて遊ぎに行つた。生れてはじめてと云つても二年と三ヶ月目である。

海はまつ青な平らな原つばのやうに見える。たゞそこで大ぜいの人たちがばちやんくくと水をはねかして泳いでゐるので、それが原つばではなくてすつかり水で出来てゐるのだと云ふことが解つた。丁度、大きなたいひに水を一つばい張つてあるのと、同じやうなものだと思つた。けれどもそれは餘りに大きすぎて、恐ろしくて、中へ入つて行く勇氣もなくなつてしまふ程だつた。

お兄ちゃんやお姉ちゃんたちは、海を見ると、もうそれだけですつかり元氣になつて、

仕度もそこ／＼にして、大あわてで海の中へ入つて行くのだつた。

一夫ちゃんは襦のお父さんに抱れて、渡うち際に立つた。お父さんの足の先きが波のために見へたりかくれたりした。それがおかしくて、一夫ちゃんは聲をたてゝ笑つた。お父さんはそれを、海へ入るのが嬉しくて笑つたのだと思つて、一夫ちゃんを抱いたまゝ、どん／＼海へ入つて行つた。

足の先からおなかまで一つべんに水の中へ浸つた。あんまり冷たいのでびつくりした。

「いやよッ。出るのよ！」

と一夫ちゃんは一生懸命に叫んだ。
「大丈夫だよ」

子供は嘘をつかないと云ふ。また子供のう

そは罪がないと云ふ。

が、子供でも嘘をつくことがある。でも、

それは本當にうそなのだらうか。

×

×

とお父さんはわらつて、一夫ちゃんの尻をばちや／＼とたたいた。そしてその時にはもうお姉ちゃんやお兄ちゃんたちが、お父さんを取りまいてゐて、一夫ちゃんがおそろしがつてゐるのを見て、手をたたいたり、水をはねかしたりしてよろこんで、騒いでゐた。お兄ちゃんは目の前で水の中へもぐつて見せた。一夫ちゃんはお兄ちゃんが急に見えなくなつたので、またびつくりして泣き出した。お兄ちゃんやお姉ちゃんはそのを見て、また一つそうよろこぶのだつた。

「いくぢのない奴だな」

とお父さんも一つしよに笑つて、仕方なしに一夫ちゃんをまた岸へつれ歸つてしまつた。岸にはお母さんが笑ひながら、でもいくらか心配氣に一夫ちゃんの歸るのを待つてゐた。

一夫ちゃんはお母さんと砂灘でお山を作つて遊んだ。折角つくと波が來てはまたそれを崩してしもふのだつたが、一夫ちゃんはどうしても崩れない山を作らうと思つて、一つ

お父さんやお兄ちゃん達はなんとかして一夫ちゃんを海へ入れやうと思つて何度も誘ひに來たが、どうしても厭だと云つて駄々をこねた。無理に入れやうとすると泣き出すのでしまひにはあきらめてしまつた。

その晩、すっかり疲れた一夫ちゃんは、お母さんに抱かれて寢てから夢を見た。

一夫ちゃんはたつた一人で海邊に立つてゐた。そばには誰も泳いでゐなかつた。廣い海岸にたつた一人で立つてゐた。

空も海もお家の壁のやうな色をしてゐた。

波が時々ざあツと寄せて來てはその小さな足下の砂をさらつて行つた。一夫ちゃんは、でも倒れないで、海の方をじつと見ながら立つてゐるのだつた。そして海は晝間の時のやうに美しい色はしてゐなかつたのに、かへつてちつともおそろしくなかつた。

よく見ると自分の背よりも高い大きな波が自分を目がけてよせて來るのである。けれどそれが一夫ちゃんの前に來ると、波はずうつ

と頭を下げてお辭儀をしてから、おとなしく足下にひれふしてしまふのだつた。一夫ちゃんの足を洗ふ海の水は温かくて、お母さんのやさしい手が撫でゝくれるのと同じやうだつた。

すると波が

「いらつしやい、一夫ちゃん。一しよに遊びませうよ」

と云つてゐるのが聞えた。そして白い波がしらを一夫ちゃんの方へ振つてまねくののだつた。一夫ちゃんはどう／＼海の中へ入つて行つた。水は足、腰、それから胸までつかつたが、晝間入つた時のやうに冷たくはなかつた。お家のお風呂へ入つた時よりもつと氣持ちが良く、もつと肌ざはりが良かつた。一夫ちゃんはちつとも恐がらないで、どん／＼深みへ入つて行つた。水はお首のところまで來た。それでもこはくはなかつた。

すると一夫ちゃんは何時の間に自分かひとりで泳いでゐるのに氣がついた。波が一夫ちゃんの身體を高いところへ運んで行つたか

と思ふとまた低いところへおとして行く。また高く、また低く、一夫ちゃんは波どもと一しよに遊んだ。それはとても面白くてとう／＼聲を出して笑つてしまつた程だつた。時には波のお腹へもぐり込んだ。晝間お兄ちゃんがやつたやうに。すると波どもはくすぐつたさうに笑ふのだつた。

ずいぶん長い間さうやつて遊んでゐたやうな氣がする。

氣が付いて見ると、自分がずつと遠くの方へ來てしまつたやうだ。海邊が遠くの方に見えるのだつた。その岸のところにお母さんが立つて一夫ちゃんの方を見ながら待つてゐる。急にお母さんが戀しくなつて、そつちの方に泳いで歸らうとしたが、身體はちつとも進まないのだつた。

「お母さんのところへ歸るのよう」

と、一夫ちゃんは泣き出したくなつて大きな聲をあげた。すると波どもは

「じやあ、歸りませうね」

と云つたかと思ふと、まるで大きなてのひら

にのせてくれてゐるやうに、岸の方に一夫ちゃんのからだは運ばれて行つた。そして、そつと砂濱の上においてくれた。お母さんがそこに立つてゐて、

「よく歸つて來たね」

と云つて確りと抱いてくれた。

「坊やおよいだの」

と一夫ちゃんはゐるばつて見せた。お母さんは頭を撫でくくれた。

「さよなら、一夫ちゃん」

と波どもは云つて、一せいに白い波がしらを振つて挨拶した。

「あばよ」

と一夫ちゃんも手をふつた。

「またいらつしやい」

と波どもが叫んだ。

そこで、一夫ちゃんは眼をさました。

秋になつた。お兄さんやお姉さんは毎日學校に行くので、一夫ちゃんは大い獨りで遊んでゐた。それでも遊びには行かなかつた

がお兄ちゃんやお姉ちゃんは家にゐる時はよく海の話をした。

そして

「一夫ちゃんは遊びに行つてどうしたの？」

とからかつた。

「一夫ちゃんが海へ入るのは厭だと云つて泣いたのを思ひ出して、もう皆んなは笑つてゐるのだつた。

でも一夫ちゃんはほんとに眞面目な顔をして云ふのだ。

「坊やおよいだの」

「あら、坊やおよいだんだつて。どうやつて遊いだの？」

「かうやつて」

と一夫ちゃんは疊の上へからだを投げ出して手足をばた／＼させるのだつた。

「あら、あゝやつて泳いだんだつて」

と皆んなは手をたゝいて笑つた。

でも一夫ちゃんは一所懸命で手足をばたつかせて泳ぐ眞似をするのだつた。



兵庫縣 江岸寺友則

この大い歴史の中にわれもあぬ身

の低けれどつかへまつらん

評 我が國は今、未曾有の有事に逢ひ、大
きな歴史的展開を遂げやうとしつつあ
るこの偉大にして困難な時代に生れ合
せて、己れの能力を役立たせ得ることを
作者は感じ、深い憂鬱をもつてある
やうである

東京 江崎孝雄

美しき野邊の花びら手にとりて父

の御影の遠きを思ふ
評 野を歩んで作者は美しい花をつんだ
先考の翁が迎ければ供へようものと
父の心算の遠國にあるのを病めた孝心
とやさしい心持の溢れた一作である

北海道 平井善意

地獄の夜のあつき夜すがら子ら抱

きて飯炊追ひつ寝ねざりしかな
評 饑饉の思出であらう、子に對する親心
のあらはれたものである

北海道 寺田嶺山

召され行くますらをわが子この度
は皇國のために親すてて行け

京都 水田七郎

電線を五線譜として燕等の並びて

歌ふ夏となるかな

落日は沈み入りつつうつくしき此
の世と見えぬ彩をもちけり
北支那遊軍 古賀房雄

留守宅は文受くること老い給ふわ

が父母の姿うかびぬ

姉逝きて、われ一人なりあぢきな
く物煮る窓に降り注ぐ雨
秋田市 小崎蓮葉

夏來ぬと心ときめきせしものを

やひぐらしの啼く頃となる

鳥羽玉の闇の湖上を唯一つしづか
に船のともしびの行く
大坂市 郡大八一

修業の旅を終へ十三年ぶりに古里へ行く

如何ばかり變りましけんたらちね
の面影うかべ飛ぶ心地して行く
東京 梓 晴子

朝鮮 靈江八年坊

生も死もなか恐れん天地の成す

がままたる我が身と知れば

北海道 花田順住

大陸の秋の嵐の如何ならんみい

き人の思ひやらるる

徳島縣 武島波留

あらはなる死をば語りて病む友の

かなしき心いためずやわれ

東京 藤林貞子

秋晴れのまさをの空を天かける飛

行機の姿よし我れも手をふる

手にとれば亡き戰友のこのかたみ

インクの色もなつかしく見ゆ

木に凭りて歌書きをればほのかに

も木立透く陽の一條のおつ

久にして母とふしどを並べつつ語

れば幼な心湧き出つ

亡き父の在すと云はれ抱かれたる

遺児水まゐる施餓鬼かな

鳥 取 菅原獨去

堀越えて飛びこしボオルしばかり
は取りに來ぬ子らをかしくもあり

東京 淺井まさき

爆創のみ足の露よ、とく撫えて歩

み給へと祈る姉かな

山口縣 長岡白朝

石郷山にて

一、二隣越えしうれしきこの山の

鎮たれたり登るわが前

夥死する魚ありと云ふ便りあり百

四十度の戦地を想ふ

トラツクが埃の中をひた走り乗る

兵の體白なりけり

堺市 笠井松枝

山の尾根ならにまろく瀬戸海に

縋なしつつ横はるかな

長病みば外の世界とはなれつつ歌

よむことの樂しみとなる

茨城縣 伊藤はる

町々の名に古への偲はるるいとど

菜えし桃山の時

京都市 福崎孝治郎

投稿規定

はがきに一回二百以内とし
「淨土」編輯部歌壇係あて
に送ること。



山

鳩

山鳩がクツクボロクツクボロと裏の森で鳴いてゐます。その鳴くたびに、熟れた枇杷の實がボロボロと落ちるやうに思はれ

身 邊 雜 話

臥 心 二 つ 三 つ

金 田 明 進

て、何か、ものしづかな自然の中に、無邪気な戯れがなされてゐるやうに感ぜられるのは、私が病臥して二た月目の或る朝のことでした。

せわしい氣持で、いつもかけ足で歩いてゐたやうな健康の日の生活にはキヤツとすることの出来ない自然の聲を私は耳にしました。

山鳩の聲は、この土地に於て毎年春から夏にかけて、いつも聞くのを楽しみにしました。

しかし、そのクツクボロとなく聲に熟れた枇杷の實がボロボロと落ちる静けさは、この病の床で始めて味ひ得たのです。

熟れて落つ枇杷の實はろゝ鳩なけばこれは句だか何だかわからないものです

が、口づさんで臥ながらそのときの心もちを颯に感ぜめて見たものです。

ほんとに病臥することは辛いことです。だが、その中に平常の健康の日に味ひ得られぬ發い鬱鬱や心持を味ひ得るものです。病臥三ヶ月、私にとつて生れてから三日と臥た聲えはありませんでしたが、こんどは始めて重應を味ひ、病臥三ヶ月を鬱鬱したのでした。臥てゐて友松師の雜記をよんでゐたら、「臥心」と云ふ文字に出會ひました。なんだかひきつけられる言葉でした。

にこり絶え聞かない池の水が、摩尼寶珠の力で、底がハツキリ見えるほどに澄んだやうな清らかさが、「臥心」の中に求められるのでは

ないかと思はれました。そして、平常、妻や子供をいらだたしげに、又口ぎたなくさへ叱りつけてゐた自分が、いかにも涙りのかたまりのやうに思へて、口激きを助けてくれる妻に、薬湯を運んでくれる娘に、感謝の涙を催す心の清らかさを感じるのでした。

呼吸と念佛

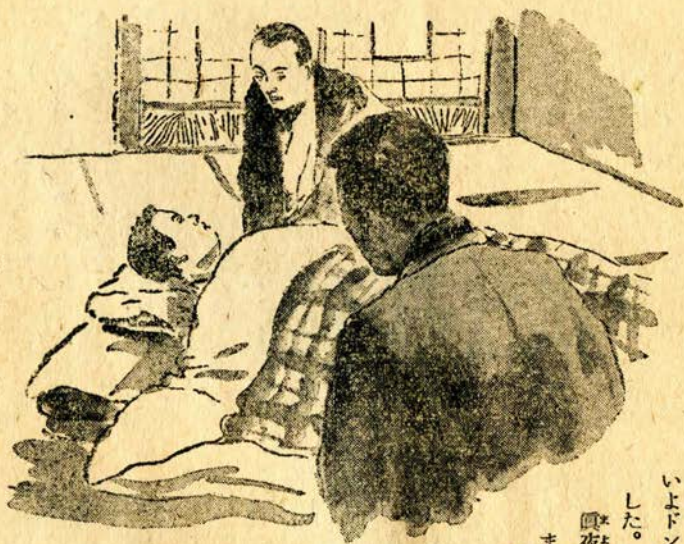
私は曾て修養結業に参加して、富士山麓の朝の大氣を深呼吸したとき、今までに味ひ知れなかつた、清らかな大きな、然も尊い呼吸を知りました。

ひとときの草木のいきと共にあれば

この身ながら天地ひろし

といふ師のお歌を覚えてゐます。私共の知らず知らずに行つてゐる呼吸もけつして私ひとりで出来るものでない、私の吐き出すきたない酸欠瓦斯と交換に、草木の吐き出す新鮮な酸素を吸ひ取つてこそ、私共の呼吸は安全に行はれる。一つの呼吸の中に天地草木と共に生きた大體を知れ」とめざまされたとき、私

にとつて呼吸の尊さは深く感ぜられました。しかしながら、こんど思つて、いよいよ、



息苦しくなつて來たとき、私は夢中で醫者の相談を求め、苦しさを家の者に訴へました。

それは、私の呼吸が腹の底から湧きおこる強烈なヒヤツクリのために數日妨げられていよいよドン詰りかと思はれたある夜半のことでした。

深夜中に二三丁先きの電話のある寂しづまつたお店を起して電話をかりて、醫者を頼みに行つてもらふのがもどかしくて、呼吸はますます苦しくなりました。

そのとき、「自分はもうだめだ、この呼吸をこれ以上つづけることは出来ない。おれは一生けんめいで自分で呼吸してゐるのだ、もし自分で意識して呼吸を努めなかつたら、息は絶えてしまふ、早く醫者を呼んでくれこれこの通り、おれはもう吐く力だけで吸ふ力はないのだ」と枕頭の者に訴へながら、太い苦しき吐息をつづけてゐたのでした。そのうちに電話のお店の主人である急便同行の岡部

さんが来てくれました。眞夜中なのに、町長さんであるお医者様が自轎車で和服のまゝかけつけてカルシウム注射や強心注射をして下さいました。顔がボーッと暖かく感ぜられて呼吸が幾分楽になりました。岡部さんはお念佛を靜かに稱へてくれました。そしてお医者さまが「大丈夫ですよ、私が明日の朝までついて居てあげますよ」と大きなこえで云つて下さつたのが、とても嬉しかつたのです。

私はすこし楽になつた呼吸のもとで、お医者さまに「先生のおいでもう少しおしおければ、私の呼吸は止んでしまひました、死んでしまつたのです、先生は命を救つて下さいました、ありがたうございました」と何邊も申しました。そして、

先生が「いゝえ、そんなに簡単に死ねるものではないですよ、今たとひ、あなたの呼吸がケイレンのために止まつても、それは假死であつて、人工呼吸ですぐ回復しますよ。」と云はれたのが耳にのこつてゐます。

この重態のクライマックスをそれから數日後自分で思ひ出して見て、なんと自分はそつかしい人間であらう。呼吸は自分だけでやつてゐるのではないのに。それに又自分でも最後を感じながら「お念佛」が稱へられなかつたではないか。お珠數をもちながら、どうして一聲のお念佛も出なかつたのだらう、岡部さんの枕元でのお念佛にさはれて、どうしてお念佛が口に出なかつたのだらう。苦しい呼吸だつたからだ、いや、平生のお念佛が本當ではなかつたのだ、臨終に念佛出來ぬやうではまだダメだ。と感ぜられました。そしてあとで念佛の先輩が見舞においで下さつてこの話をしたら「それでいゝのだ、ふだん念佛申す者には、たとひいまはの時に口に出不着なくても、そのまゝが念佛になつてゐるのだ」と云つて下さいました。

このときも「さうだお念佛は自分が申すのではない、申させて頂くのだ」とつくづく感じました。呼吸も、お念佛も、共に大きなふいのちの

中に續かせて頂くのだ、この呼吸の絶えざる如くに、わが念佛も絶えざれと、切に切に自らを戒めたことでした。

童心の芽生え

二月も天井ばかり見て寝てゐた者が、半粒ソツト起き上げてもらつて深緑のわが庭を見たとき、まばゆい位に眼がキラキラと刺激されました。そして、何とも云へない嬉しさに思はず微笑を浮べました。寝ながら柘榴の花の見えるやうに戸を開いてもらつたり、モクゲの花の咲いたのをきいて喜んだり、寝る前に苗をうえた茄子が實をつけたときいて、その若い實を畑から採つて來てもらつて、紫の色澤を手ざわりして賞でたり、柚子の實が豆つぶほどに成つたのを採つてもらつて、鼻に押しあてゝその香りを嗅いでなつかしむなど、たしかに臥心には子供のやうな無邪氣さが蘇るのを感じました。

それよりも、私が起きられてから一番うれしかつたことは、病前に開闢した保育園の園

兒たちが、二月半ほどの間にすつかりなれて、變つたやうにおとなしくなり、お遊戯や手工に樂しんでゐるのを、保育室の中に見たことです。

十年も前から、この町に是非結婚願がほしいと思ひつめて来て、今年に紀元二千六百年だからその記念事業として是非共と決心し、有志の協力を得て漸く開闢したのでした。

奇しくも、開闢の前日には、總本山知恩院の紀元二千六百年記念大法要に出席を命ぜられ、湛然上人の御廟前に、この事業遂行の覺悟をお誓ひすることが出来たのでした。

そして翌日自坊にかへり開闢してまもなく、穢陋の身となり、但復後に少しでも草木を賞で、小鳥の聲を樂しむことを教へられたのは、子供の心にかへれ！ 保育の事業は幼兒愛護の心が中心であり、それには自然愛護の心持ちをもつことが大切である所以を悟らしめて下さつたのではなからうか。

舊曆七夕まつりに園兒の遊戯を舞臺に眺めて、何となく最後の方の轢きの中に、驚きの

芽ばえを感じ、うれし涙にぐれました。

いたつきは辛きもの、苦しきもの、されどまた教へられ、覺まされるもの。病の中に心の轉さと明るさを求めることは信仰の然らしめることでせう。病中危きを慈恵業に救はれ再生の日、その臥心の二つ三つを想ひ浮べ皆さまに語りうるを感謝いたします。

賣場の机から

秋のはじめ、私は病後ばかりで買物のため上京しました。上野驛まで一時間ほどの車中お約束の「淨土」の原稿を書きながら過し、杉坂屋の一階の郵便局のポストに投函して、三階の賣場へ行きました。買った品を彼方此方へ送り届けて欲しいと思つて、屈先や私の名を申し出ると、屈先のお前の中に「中村康康先生」とあつたので、その店員は「この方はアノ淨土宗の方で橋本（樂榮）さんのお宅でヨク御講話下さる方ではないですか、私もそのお話をよく伺ひに参ります、これこの通り「淨土」も毎號愛讀してゐます。」と突然、

複寫紙の鐵筆を止めて、目の前の事務用机の抽出しから「淨土」誌を一冊取り出して眞をめくつて見せられました。私も、あまりの驚しさに、中村先生のことや、橋本さんのことや、鐵仰會のことをお話ししました。わが「淨土」の誌友と、よもやこんなところでお會ひするとは思ひませんでした。それに、つひ今まで「淨土」の原稿をかいてゐたものが、今またデパートの賣場で、わが同僚の友に、こんなに親しく語り合ふとは……

ほんとうに思ひがけないよるこびでした。この友は「淨き友の會」の會員柳川欣三氏でありました。

目まぐるしくも忙しうデパートの職場に、淨土誌を愛讀しつゝ、概念ある業務に従事せられる氏の應持はまことに温和な暗れやかさであつた。

「淨土」はほんとに強い力で、未知の人と人とを、よるこびの中に引き會はせてくれました。

法然上人 和歌註解 (二)

安西覺承

秋

阿彌陀佛にそむる心の色にいでば

秋の梢のたぐひならまし

〔語意〕 ○そむる 自願詩「そむ」の連體形、「そまる」に同

じ。○心の 心がの意。○たぐひ 比、類、同様なるもの。○ま

し 假定條件の下に推量を行ふ助動詞。

〔通釋〕 阿彌陀佛に深く敬慕するこの内なる心が若し外に色として表はれ出でたならば、あの秋のあかくと紅葉した梢のやうなものであらうに――。

〔感想〕 單に歌としてみるとあまりに理に倣いてをり、また、「秋の梢」が、目前の景物といふよりも多く思ひ寄せた譬喩とし

のである。淨土宗の安心にあてはめていへば、三心のうち深心の心持が示されたお歌を拜してよい。

冬

雪のうちに佛の御名を唱ふれば

つもれるつみぞやがてきえぬる

〔語意〕 ○雪のうちに 時季を表すとともに下の句の「つもれ

る」「きえぬる」とそれ〴〵照應する。○佛の御名 寶號のやうに

佛名會の場合として解するのが季節の歌とされてゐる點などから

して妥當である。佛名會は佛名懺悔ともいひ、懺悔滅罪の爲に毎年十二月宮中を始め諸寺に於て佛名經に記す三世の諸佛のみ名を唱應した行事である。宮中では平安朝から南北朝頃まで、幸々で

て見られる點に於て、實感的といふよりも寧ろ觀念的になつてゐる點ひはあるが、堂々として儀樂の熱烈さを燃ゆるが如き紅葉に比せられたその傾向から押す確信の強さに、打たれずにはゐられない。病葉のはかなさにも譬へたいやうな私共の心情がこゝでも現つかしく思ひ返される

は今もかなり暇く行はれ、彌陀一佛の念佛會となつてゐる所もある。○やがて そのまゝ、すなはち。時間的の意味にとるのはよくない。

〔通釋〕 外には雪が一面に積つてゐるこの日、われも人もとも／＼にみ佛のみ名を唱へれば、この雪のやうに積り積つた衆の罪はさながらに——雪もやがては消え果てるのだが——蹉跎もなく消え果てることぞ。

〔感想〕 いかにも重々しい力の籠つたお歌。標題の上にこの力強さの因を求めると、初句の字餘、下の句の韻律である。雪のうちに」と六音で初まつてゐる所謂字餘は一見何でもないことのやうだが、よく味はつてみると非常に大膽な動をもつてゐるのである。一體に字餘といふものはそれが必然性をもち所を得て用ゐられてゐるとき、詩の味に重厚さを與へる性質のものであるが、この御詠はその適例である。下の句のつもれるつみと疊みかけて「きえぬ」と強く括つた韻律が、よく上の句の重さを受けて納めてゐるのである。この濃の呼吸の玩味からしてこの御詠の生きた力強さに隔なく觸れることができ、同時にこのお歌の親しく佛名會に臨まれた際に於ける實感の詠としての理解が與へられるであらう。

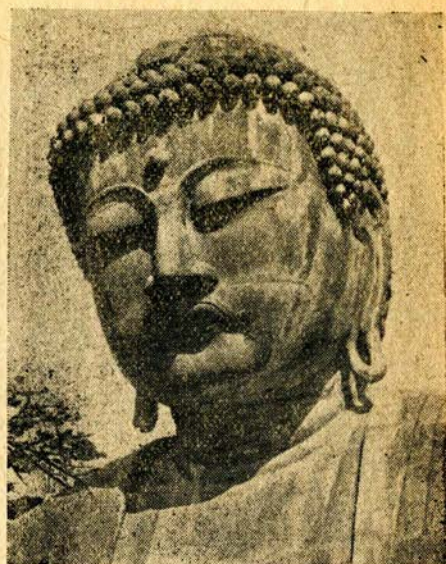
〔参考〕 佛名會を詠んだ歌は世に少くない。そのうち紀貫之の「延喜の御時の御風」と題する「年のうちに積れる罪はかきく

らし降る白雪とともに消えなむ」(拾遺集卷四)の歌とは歌調などの上から關聯があるやうに思はれる。少くとも恐らく制作時の上人の意識にこの歌が上つたであらうことが想像される。

(五一頁より續く)

然し時代に依つて墓形が異つて居りますから、將來參考になり得るものでしたら、墓石共に保存する義務があります。これは文化的に重要なことですから、地下墓に保護するものがよいと思ひます。

若し既に轉葬のものが撤出ある場合は無論整理してよろしいですが出来るならば、墓家共同の無縁塔を作つてそれへまとめて保存し、墓地へ來る大勢の人達に御詣りして貰ふやうにすれば、先亡の靈に對する尊敬の意も失はず、また一方世の進運にも即應するわけです。大に萬一にもその墓地が無縁となる恐れのある場合は、墓地管理の御寺に適當な保護費を出して永久に保護し供養して貰ふやう御依頼になつたらよからうかと思ひます。その保護の費用は利札付の國債とか公債とか又は据置貯金等の方法に依るなど、事情に應じて御考へになられたらよいと思ひます。また御整理の時、土葬の墓地ならば一丈以上掘る必要があるやうです。墓地管理者の承諾並に警察の認可立會を要します。發掘認可申請の手續きは所轄警察署では御質ねになるのが一番よろしいです。



最初は金色木造

大佛は阿彌陀さま

かまくらや みほとけなれど釋迦牟尼は

美男におはす 夏木立かな

と言ふのが、有名な興謝野晶子さんの歌である。然し大佛は阿彌陀佛であつて、此の歌の釋迦牟尼は後から「大佛」と詠み換へられ、それ以來「大佛は美男におはす」と言ふ言葉

が使はれるに至つたのであるが歌としては原歌が良いのではなからうか。尤も此の大佛を釋迦

如來とする説は、古く吾妻鏡にも出て居るから、國文學上からは全く無根拠なわけではない。又た、大佛を釋迦牟尼とする外にも毘盧遮那佛とする説も古くからあり、今日でもさうだとする人もある。それは、日本の大佛建立思想は奈良大佛以來、毘盧遮那佛思想に基づくとすることにあららしい。

毘盧遮那佛は華嚴經の佛で、現に奈良の大佛殿東大寺は華嚴宗の本山である。此の佛は全世界を法身とする佛で、世界の萬象は悉

鎌倉大佛雜談

佐藤密雄

皆な此の佛に、支持せられ、すべてのものは、此の佛に歸一することに依つて正しさを得るとせられる。此の様な佛を國都奈良に大佛として造立し、此れを總國分寺としたのが奈良東大寺である。此の總國分寺の下には全國に國分寺があつて、政治、文化、宗教の行政、指導教化を司つたのであるから、造立當時の奈良大佛は單に宗教的な意味ばかりでなく、政治、文化の統一の意味が、常に強く、又た此の意味を満足せしめるには毘盧遮那佛は全くふさわしい佛だつたのである。

鎌倉大佛も東國三十三箇總國分寺に立てられ又た其の造立は賴朝が奈良の大佛供養に參詣

して、此れを見て、大佛を鎌倉にも建てたいと考へたことから始まつたのであるから、此れも即應運那佛だと考へることは一應は背けるのである。然し鎌倉時代は政治宗教の分化した時であり、奈良大佛を復興したのは阿彌陀佛を信ずる淨土宗の元祖、法然上人の弟子、重源上人であり、且つ頼朝の參拜した大佛供養は法然上人が導師として行はれたのである。法然上人の淨土教は鎌倉武士と共に當時の親興日本の姿を示す新しい宗教だつたのであるし、鎌倉大佛造立の勸進は重源上人の弟子淨光上人で、やはり阿彌陀佛を信ずる淨土教の行者であるので、奈良大佛の造立とは人も意義も異つて出来た大佛は、現に見る様な阿彌陀佛となつたのである。

源頼朝は、夫人政子と奈良の大佛供養に臨んで東國にも大佛を造立したいと考へたのであるが、此れは建久六年のことであつた。此の奈良の大佛供養は、平重衡が大佛殿を焼き大佛の首が落ちた後を頼朝の扶けで復興した開眼供養會で、法然上人が導師として淨

土の三部經を講説されたことや、警備に當つた鎌倉武士が折からの雨を物ともせず、雨を怖れる柔弱な都人を驚かせたこと等々有名である。又た此の法會は平家を滅した頼朝が、幕府の組織は整ひ、征夷大將軍となつた最盛期であつて、彼れが文化的に勢威を示した一代の盛儀でもあつたのである。此の法會をなして妻子と共に鎌倉に歸つた頼朝は、數年ならずに建久九年の相模橋供養の落馬が因となつて、病を起し、大佛造立の志も空しく、翌正治元年僅かに五十二才で世を去つたのである。其處で、破亂の生涯を若くして逝ける頼朝菩提の爲めにも、是非其の遺志を果さんとしたのが夫人政子であり、専ら其の業に就身して従事したのが老女稻田野局であつた。將軍頼朝が此れを扶け、勸進を蒙つて重源上人の弟子淨光上人が勸進職につき、約十五年間の準備と五年間の工事を經て、相模深草の里、由井の浦近く、既に現在の地に、十二樓の大殿に八丈の金色木造の大佛を安置したのである。東鑑に依ると寛元元年六月十六日が大佛

落座供養であつたとする。然し此れは數年ならずに寶治二年の大風雨で破壊されたので再び稻田野局と淨光上人は將軍宗尊親王の外護を受けて、今度は鑄造師上總矢那村の大野五良右衛門を呼び、金銅の大佛を約五年にして鑄造したのである。此れが出来たのは建長四年とさるゝから、今年から六百八十九年前となる。此れが現存の大佛像で、鑄造師大野家の家系は今も尚ほ遺傳存續して居ると言はれる。

旅人崇敬のダイビス

露坐がよいわけ

鎌倉大佛は長谷大佛とも呼ばれるが、一般には露坐の大佛として親まれて居る。古くは淨泉寺の蒲佛とも呼ばれて、元來が露坐である様に解せられて居るが、露坐となつたのは約四百五十年前からで、もともと露坐だつたわけではない。作られた時は塗金佛で、十二樓の大殿に莊嚴されて、安置されて居たので

ある。太平記に依ると、建武二年北條高時が鎌倉で事を擧げると同時に大風が吹き、大佛の堂宇が倒れて、時行の引連れた軍勢五百が壓死したと傳へられる。蓋し高時に取つては立上りの佛前であつたわけである。此の時は直ちに再建せられ、後正平廿四年にも風災で倒れたがまた再建せられた。然し明應四年に地震海嘯に依つて堂宇塙舎が流されてからは堂は再建さるゝことなく大佛は露坐となつたのである。

大佛は斯様にして明應四年以來、可成荒廢たる中に佛像のみが残され、僧坊斷絶の狀態をつづけたらしい。

英人ギヤブテン・デヨン・サリスの西紀一六三(慶長十八年)の日本航海誌の九月十二日の記録には次の様に記されて居る。

スルンガ(駿河)とエドウ(江戸)の間國(相模)は人が多く住んで居る。其國は深山のホトケセ(佛さん)や寺を造り見たが、其の中に特別に注目すべき一つの像があつた。ダイビス(大佛)と呼ばれ銅で

作られて、中は空洞であるが、非常に部厚い。目測した所、地上二十呎若しくは二十呎あり、人が地上に坐つた様で、尻が踵の上に置かれてある。其の腕は素晴らしく大きく、體全體は鈎合がとれて居る。衣を着た姿である。彼(大佛)は此處を通る旅行者達に大變尊敬せられて居る。我々の仲間數人はその體内に入り人輪をなして腰を立てた所が非常に強く鳴り響いた。旅行者の記した種々な形や記號(樂がき)があつたので、私の仲間のものも、同じ様に此れを真似た。英文ギヤブテン・ジョン・サリス千六百十三年日本航海誌。

此れは今から三百三十年程前の外人の見聞記録で、種々な點から極めて面白い文獻の一つであるが、此れを見ても、たゞ大佛のみが立つて居て僧坊もなく、旅行者が勝手に参拜し、樂書等をして行つた状況がよく知られる。

大佛が現今の様な境域と、僧坊を具へるに至つたのは正徳二年に増上寺祐天僧正が、信

者野島泰禪の寄附に依つて、僧坊を復興して、高德院と名づけてからである。

大佛は元來露坐たるべきではなかつたが、然し偶然ながら露坐となつたことがかへつて保存上からも、景観の上からも良い結果を持ち來らしたのである。佛は南面して居て、由比ヶ濱に向つて居り、踵より上の高さから相模の海を直接に見降ろすことが出来る。其處で、日々颯分ある海風が直接に青銅の像に吹きつけて居り、若し堂の中にあるとしても颯分で腐蝕さるゝ筈であるが露坐である爲に、一度び雨が降れば颯分をすべて洗ひ去るのである。又た露坐であることは、奈良の大佛がしばしば経験した様に、堂宇の火災に依つて首が燒け落る様な災害を來すこともないと言へよう。だが大佛の歴代住職は幾度も大佛殿の再建を計つたことは事實である。然し鎌倉幕府後の鎌倉では、經濟的な集中力がなく失敗に終つたのである。明治になつてからは一度三條實良卿や外國使臣達に依つて佛堂建立を計つたが成らず、其の後は完全に露坐論が



景観の上から、保存上の理由から確定して、最早大佛殿建立説は内外いづれよりも起らなくなつた。いま、大佛の周圍に六十五個の明窓以來の礎石があるが、此れは往昔の大佛殿の壯大さを偲ぶに足る美事な伊豆石である。

雨上りの濡れ佛

月光にみる美しさ

大佛を眺めるには何時が良いかと聞かれることが多い。一寸話は外れる様だが、大佛を御寺とは知らず、公儀の銅像の様に考へて居る人が多い様である。然し大佛は淨土宗の大異山滝淨泉寺高徳院の本尊阿彌陀如來であつて、實は單なる觀光の對象でなく、又た其の様に感じさせたことはないのである。

大佛の仁王門には、和意殿で、此れは「是れ如來の門なり。阿彌陀の聖殿なり。何國人たるを問はず、如何なる宗教

を奉ずるものたるを論せず、此の門を入るものは必ず敬禮すべし」と言ふ意味を標示して徒らな觀光者を啓蒙することに努めて居るのであるが、何れも良い効果を生じない様である。尙ほ此の標示の英文は明治の初め、英國から歸化した法律學者の小林ベーカー氏の作で、雅文體で作られ、外人間には各文として知られて居るものである。

然し、こたわつた言ひ分を抜きにして、如何なる場合が一番壯嚴に大佛を拜することが出来るかと考へても、私の様に日々大佛様の下で起き臥して居ると、丁度家族の醜の美醜が埒らないと同様に、一寸叩禮な答が出来ない。

夏木立の中に華男におはす姿は有る過ぎるし、櫻花の中にそびえる大佛は名所案内繪の一枚看板となつて居る。又た春雨の中の大佛は麗重畫と傳える板畫の題材である。此の雨の中の大佛は流石に畫家の捉へた所だけあつて、雲坐の感じが切實であり、又強い雨の中の大佛は、輕迦が悟りの後大風の中でも平安

な悟りの靜坐を依然としてつゞけたとさるゝ姿も偲ばれて、何かしら東洋的な若しくは佛教的な感じが深く、外人も此の情景を好む様である。だが此れも古くから所説漏れ佛として人の知る狀景で、特にこと新しく述べる迄もない。強いて言へば、降りつゞいた雨がかりりと上つた時に、未だ露を含んだ背蔭の中に見る大佛は非常に美しく、此れは露坐特有な潤らかさがあり、華男の感じがまたものである。

然し私共も時に美しさを見上げて、感嘆する場合がないわけではない。それ等の多くは夏から秋にかけて月夜的美觀、雪の朝、櫻の咲初める頃ほひである。月夜の代表は何に依らず仲秋名月の時である。此の夜の大佛は、月が仲天に懸る少し前に、西南隅の樓の下で見ると最も美しい。月光は東甌から甌面の大佛に降りそゞぐのである。少し前からよみの露を七分通り照して、月光は右肩から流れの様にすべつて膝の上に盛り上り、腕を纏んだ手がそれから水に浮いた様に見えるのである。

よく外人が月夜に參拜に来て、屋外燈を消して呉れと頼むが、此れは時の月光の大佛に懷れて來るのである。

月の夜に限らず、一般に大佛を見るのは、西南隅の樓の下が良い。此處は臺座から大佛の背丈だけ西南へ離れた地點であつて、踵の高さに對しても、佛の正面に向つても四十五度の方向にあり、全體を一目で見られる。而も佛らの建物が都合よく神界に入らず、大佛の左裏の若松の枝が踵のやゝ上に見えて、佛の高さを引立てる様に感じさせるし、又た此處から見る時に、鐵欄に被はれた後光山がほんとうに光背の役目をつとめて、如何にも自然な背景とした雄大な感じを興へて呉れる。外國へ出す日本觀光ボスターも此の地點から撮影してある。

雪の朝の景観は門入つて松並木を歩きながら、松の上へは半身の雪を頂いた姿が見えたり隠れたりするのが私には最も好ましい。佇まつて見るならば松並木を出た所で、臺座の近くへ登らずに見るべきである。背蔭の後

光山が半分、老松の枝が左肩にかゝり、いづれも雪を真いて未だとけ切れない時に、頭から肩に雪を被り膝や手の上の雪を眺め給ふ様な姿で、音なき雪の朝の中へ、東洋のはゝ笑みと言はれる口元が、如何にも靜かな音を立てゝほころびさうである。

雪の朝は雪だけの初まらぬ時がよく、櫻の頃ほひは朝日が花の枝にさす時がふさわしい。花の大佛は、像の右にある老櫻の一の枝が肩から胸のあたりへ懸る様にして見るのであるが、此の感じを小學生にきくと、「大佛様が下をむいて、櫻の花と御話して御出になる様である」と答へた。子供らしい見方であるが、大人も童心に歸つて見ることが出来たら、最も美しい大佛に接することが出来ると思ふ。

形は男性的だが 生地は女の肌のやう

生地は女の肌のやう

大佛のモデルは一體男か女かと言ふ論をし

たことがある。此れは京都大原の三千院にある丈六の彌陀三尊のモデルは女性であらうと言ふ話から始まつたのである。三千院の方は藤原時代の作品で女性感が強い様であるが鎌倉時代はどうかと言ふのである。正直に言へば私には藝術的な知識が全く無いのであるから、鎌倉時代に多い子育地藏像や延命地藏像、はすべて女性で成熟した處女の姿感が感ぜられる。是れは有名な鎌倉八幡宮所蔵の辨才天像にも感ぜられることである。又鎌倉時代の製作の運慶の仁王尊や鬼神の如きは青年よりはむしろ壯年の男性で、而も總體的な感じを現代の力士で言へば前田山や武藏山若しくは男女ノ川であつて、女性の肌を思はず玉鐲や双葉山ではない。然し大佛は双葉山や玉鐲の感じで、作家の感じから言へば、快慶の寫實的な作品に近いものである。顔の形と生地は快慶の作として有名な東大寺の地藏尊と同様に處女の生硬さを思はせ、胸は八幡宮の辨才天女にも似て生長し切つた女性の地肌を感じて居る。此の女性的な感じを男性化して居る

のは、總體的には像の巨大性であり、同時に肩幅の廣いこと、頭の大いこと、首のつけ具合ががちりして居ることにあると思はれる。又顔面に鼻筋を通らせ鼻の下部を脗割獅子鼻とし、耳を大きくして、全體の造作を深く切り込んで表情を鮮明にしてあることも男性化する作用になつて居る様である。日本女性の像は顔の表情を明瞭にせず、不鮮明さの中に色々な想念をいだかせる所に魅力があるのであらう。此の女性的な形を與へた所に巨大像特有の間のびた醜惡さを無くした秘訣がある様である。ものゝ大いさには限度があつて、如何なる美男子でもそのまゝ四十二尺に擴大して見れば、醜惡になるのではなからうかと思ふ。大佛は遠近をつけない見方で見るとすれば必要以上に頭が前にかきみ、又頭と上半身が非常に大きい。然し此の爲めにはれを下から仰ぎ見る時に地盤がとれて見えるのである。又巨像に特有な醜惡感がないのは今述べた様に地肌と女性感を多分に盛つてある爲であるが、又同時に他の銅像に見る様に

頭が小さく見えたり、うしろへそり返つたりした感じがなく、如何にも安定して見こるのは頭が大きく顔かきみに作られて居るからである。

又外人は大佛の東洋的靜寂感をたゞへ、これをば口邊の靜かなほゝ笑みに見出すのであるが、實際は口元よりも眼の切り込みに重要さがある。眼面に垂直に深く切り込んで、上目ぶたを豊かにふくらませ、眼晴を下向けにし、目の下を充分にそぎ取つてあることが靜座禪樂の味ひを出して居る所以である。

新婚夫婦が参つたり

安産の祈願が多い

大佛に關する信仰を聞かれることも度々あるが、何しろ七百年の歴史を経て庶人に敬慕されて居るのであるから、世間では種々な考へを結びつけて居ることも事實であり、偶然な出来事の變々が靈驗として信ぜられて居るらしいが、私共のきゝ知らぬものの方が多

い。此處にきゝ知つた中で無邪氣な面白さうなのを二三拾つて見ると、大佛の手の中には雨上りには澤山の水がたまる。此れを取りに来る人があつたから、何にするかと訪ねると、「病人に飲ますと氣力が癒る」と言ふ人があつたし、「安産する」と言ふ人もあつた。多分大佛様の様な美男子を産みたい人であらうと思ふが、大佛の周圍に置いてある黒い石を持つて居るや男子が得られるとか、安産するか言ふ考へをする人が可成りにあるらしく、取つて行く時は判らぬが、お産が終つてから遠方から送り返して来たりするので知られるのである。

然し一番はなやかで、麗なのは、新婚夫婦の來ることである。新婚した二人が一緒に大佛の腔内へ入ると、つまり大佛の腔内で生れ變つて出て來ると、隨分大變ひなく特に男が第二齣を作つたり、女が若き燕を變するに鑑る様な不自然なことが起らないと言ふのである。此れは迷信として否定するよりは、むしろ笑つて背くべき種痘のものであらう。また

病人が大佛の腔内に入ると健全になるとか、御産をする人が安産するとか、産の悪いのがよくなるとか言ふのも同様のものである。大佛の腔内へ入ることは腔内で生れ變ると考へられ、此の意味は色々と解釋がつくから、此れについて我々の知らない様な各種の信仰もあるらしい、大佛へ日参して居る人もあるが、未だ何の爲めか聞いて見たこともない。何か願掛けのたぐひであるかも知れない。信仰は自由で、信するものゝ心にあるのであるから參詣者が如何なる意味で参拜するとしても、それには文句の言ひ様がない。

然し大佛は阿彌陀佛であるから、阿彌陀佛として信仰するのが正しいのは言ふ迄もない。唯だ私共の個人的な日常生活で感じて居るのは、大佛をお守りする人が惡事をするとき必ず佛罰を感ぜられることが顯著に起つて來ることではあるが、此れは大佛に仕へるものと古來からの信仰でもある。

(讀者は大正大學教授)



山梨縣 程原 津谷
鳴子齋半人前の男かな

評 送りの秋の和やかな田園風景を思はせられる。半人前よりないと思はせられるこの男も、收獲期であればこそ、蜜を相手に鳴子齋がつとまつてゐると云ふのである。
舌をペカンとあけてゐる様な若い者が想像せられ、森田恒友、小川宇鏡等の田園風景畫が思ひ用される。半人前が面白い。

岩岡市 長岡 白朝

神符の荷背にブラ／＼と下山哉
評 登山して、頂上の神社からいたゞい大御神符を背の荷物として下山したと云ふのである。中七字によつて軽しくもない山の有り様が思はせられる。樂しげな下山であり。この場合の龍が生きてゐる。

裁縫縣 豊田千代子
秋の奴を遣ひし團扇のふと白く
評 暑夏ほど奴を遣ふことに懸命でない頃に、まだ存在してゐたと思はれる奴奴を、手元にあつた團扇を持つて遊び持ひながら、ふとその團扇の白さが際だせられたのである。秋故に團扇の白さも淋しく思はれた作者

であり、優しい女性の感受性を感じさせられる下五字はことに余韻がある。

山梨縣 程原 津谷
山の秋温泉の音に眠りけり
評 子を産みしほそき指もて月を指す
同 水田七郎

秋鵬の日は閑にも踏切番
同 水田七郎

風澄むと子等の遊びに雲寝かな
小樽市 平井 善慈

精進田明るく蠅のとびかへる
東京市 森田 法典

龍膽の花をか／＼けて岩の原
名古屋市 福田 眞吉

温泉へ通ふ小路の草の花
長崎市 池田 眞三

一本の茂蕨りて蟬の聲
東京市 梅

後ぞへもなくむかへ火へさゝ氣げ
人

凝 賀 重野ふみ子
大根の鐘が涼しき青田かな
今 治 駕津 光子

高み行く波音きゝて藤椅子に
京都市 福島孝治郎

無花果の葉さへ萎れて土用照り
大阪市 森 正義

をがら焚き置地の奥にも人の影
山梨縣 八十五才 程原 一幸

漁舟近より行きぬ磯涼み
小樽市 中村 茂淵

新涼の丘の眺めや湖静か
岩岡市 長岡 白朝

鰯釣へ手を貸せといふギザミ網
大分縣 石堂 柑山生

柵巻の崩れも露露祭
東京市 三野 輪幸節

露祭り露の中から提灯が
北海道 花田 昭佳

荒渡のしぶきもよしや岩蓮花
東京市 森田 法典

枕邊に阿陀彌經ある夜長かな
函館市 清水 栢葉

女郎花雨の夕となりけり
大分縣 田邊 山雨

こほろぎの靜かな此處に山清水
高知縣 橋山 亮圓

初鰯の流れにつけて古障子
人

兵衛縣 齋藤 知則
秋もはや蟬の聲より来りけり
東京市 五島 寶城

雨煙ふる葉末の望ものうげに
栃木市 大輪 清

道見ゆる玻璃戸を叩き響き
荏賀島 吉野 法泉

鳥賊をさく潜の灯涼しけれ
八幡市 森田 拓貞

縄れ合ふ水輪の數や水澄し
新潟縣 山田 隆子

日盛りの國旗あせしも長期戦
龍木 長尾 痴童

炎熱の佛間にぬる／＼僧法衣
東京市 松島 成泰

蝶々の鑑頭去れば眞紅なる
京都府 福島孝治郎

襷り替へし布もたちまち土用照り
群馬縣 北條 祥雲

立秋や露の實取りの童遊
長崎市 池田 春林

月かげの透きかぬ時鳥
東京市 松岡 成泰

塵箱の一 番上の水仙花
人

投稿規定

官製はがきに一回二句以内とし「亭主」欄郵便係あてに送ること。



問

佛教は釋尊の
成道を根底と

苦惱と救ひとの矛盾

なし、その内容は佛の大慈悲の發見であり
念佛衆生攝取不捨を以て我々の救はれる道
であり、眞生命への復

歸であるとするなれ
ば、何故我々は自然法
爾に救はれて居なかつ

たでしょうか。無明の
起源が佛の無慈悲を象
徴すること、況一神教

と變りがないと思ひ
す。苦惱の存在が不合理です。

(荏原 懷疑念佛者)

答

私達私達の氣付く、氣付かない
の如何に拘らず、如來の大慈悲の

中にいだかれて居るものです。それは恰度子
供が親の慈悲の中に包まれて居るのと同じで

信 仰 相 談

(質問歡迎)

壇 堂 中 村 辨 康

す。私達はたゞ氣付かないで居るだけなので
す。その「氣付かない」ことそのことが「無
明」であつて「無明」のあることが佛の無慈
悲を象徵するなど云ふことは勝手な言ひ分に

過ぎません。親不孝な子供が遂に親の無慈悲
をうらんで居るのと同一であります。父親が

子供に仕置きをするのは決して無慈悲からで
はなく、眞人間にさせたい眞實の慈愛からで
す。即ち覺醒させたいからです。かくて私達
の「無明」もまた「覺醒」することに依つて

「明」とするのです。だから覺醒するかしな
いかに依つて「明」と「無明」とがあり得る
譯であつて、佛の大慈悲には何の變りもあり
ません。苦惱の問題もまたその通りで、苦惱
は無慈悲の然らしめたものではなく、私達に
覺醒を促がす慈悲の變形に過ぎません。親の
折檻です。親は其の子が憎くて折檻するので

はありません。可愛いから
折檻するのです。だから目
醒めさへすればよいので
す。改心さへすればよいの
です。随つて苦惱こそ覺醒
を促がすところの救の最も
大なるものではないです
か。然るに自分の目醒めを

機に上げて唯だ苦惱脱却のみ神佛に祈るが
如き信仰は、要するに功利的信仰であつて正
しい信仰ではなく邪信であり迷信でありま
す。世には愚龍を要求する者多く、神佛への
信仰は愚龍をのみ唯一の條件として居ります
が、そんな手前勝手は許るされません。個人



信仰相談

主義です。自由主義です。そんなものこそ不合理です。病氣も災難も苦惱も、或はその反対の幸福も一切のことがらに凡て恩寵にあると眞實の太慈悲を窺見すること、それが正しい信仰であつて、この信仰に立つ者こそ、斷取不捨を知り得るものであり、自然法爾に無常變却のむかしから救はれて居る事を知るものです。畢竟信仰は救ひを新しく求めめるのではなく、救ひの事實に氣付くことです。現に自然法爾に救はれて居る事を痛感することをして入信者とし隨つて自己に覺醒を求むる者ともなり得るのであつて、それでこそ苦樂の邊見なく、顛倒の妄見なき正信正覺の者となり得るでせう。また無明に起滅などはありません。私達は無明の昔から無明なのです。現實を「救はれて居ない」と思ひ、苦惱を「不合理」と考へて居ることそのことが既に「無明」なのです。良寛和尚は「病氣の時は病氣がよろしく候。死ぬ

時は死ぬのがよろしく候」と云ひましたが、此處まで来ないと本ものと云はれないでせう。此は般若の空に徹した上から云つたのかも知れませんが、濕土教の信仰に依れば一切を如来様の恩寵と見、一切を救ひと見、一切を喜んで深く受け、如何なるものもそれを乗り越え／＼して進んで行く「往生」の道を得るのです。次にあなたの仰る汎一神教とは如何なるものか、よく存じませんが、理窟でなく感情と意志との事實認識が一番求めらるべきものでせう。

戦死と信仰

問

小生は第一線に〇隊長として御來公して居る者です。貴誌四月號第一頁に法然上人法語として「弓箭の家に生れたる人たとひ軍陣にたゝかひ命を失ふとも念佛せば本願に乘じ來迎に預らんことゆめ疑ふべからず」とありましたが、戦死を第二義的に「命を失ふとも」として居らるゝこ

とが、聊か不審です。名譽の戦死を遂げて興亜の人柱となることこそ、眞に念佛道を實行せるものと存じます。何はさておいても先づ第一に本願に乘じ來迎に預る機根なりと考へます。

武運芳出度戦死することは護國の神となると同時に、又極樂に往生することと部下にも教へ、また自らもさう信じて居ますが如何でせうか、御教示を願ひます。

(北支派遣〇〇部隊 名倉生)

答

御不審ごもつとありますが、之れには譯があるのです。と云ふのは、武藏の七黨の一である猪俣黨に甘粕太郎忠綱と云ふ人がありました。京都に在職して居りました頃、觀山の堂衆が學生と争ひを生じ日吉の八王子の社壇を城廓として立てこもり戰闘行爲をしたことがありました。(建久三年十月)忠綱も堂衆追討の官軍に加はつたのでした。その節法然上人を御訪ねして云ふやうには「本願を信じて念佛すれば救はれるとは年來承はつて居りますが、それは平生の時の事



菩薩像

であります。然し武士の習ひ山門堂衆追討のために、勅命に依つて唯今八王子の城に向ふことになりました就いて、聊か心に決しかねた事があります。それは

武勇の家に生れた身としてかゝる非常の場合に於ては一意唯だ敵を多く討ち取ることに専心すべきであつて、謂ゆる悪心盛んにして願心（ねんしん）を起すべき餘地がないものかと思ひます。

またそれと反對に殺人を罪惡なりとして敵を殺すことに躊躇すれば却つて或はとりこにならぬとも限りません。然らば永く臆病者よとの耻を残すことにもなります。素より一命を擧げた身でありますから、命を捨つことは必定ですが、それ故にこそ往生の大事をも成しとげた。望みを捨てることが出来ません。

此の弓箭の道にもはづれず、往生の素志をもとげ得る道がありますならば是非承りたいものです。とお尋ねしたのに對して答へられたのがこの法語であります。そして今お尋ね

になつたものはホンのその一節だけですから意を盡くして居ない點もあり、且つ當時に於ける社會通念としては、たとへ如何なる動機にもせよ、人を殺すことは十惡罪の一つであつて罪惡の最も重いものと思ひ込ませられて居りましたから、そう云つたことも考慮に入れて置かないと合點し難いものがあらうかと存じます。

法然上人の忠經に言はれた意味は、信仰の極致は道德的な一般通念に左右されるものではない。随つて罪があるとか無いとか云ふことにも依らず、または死に臨む原因の如何にも依らず、時と場合も一切凡て「救ひ」そのものの影響にはならぬ。唯念佛を信じ得たか得ないかに依つて決定せらるべきものだと云ふことを明かにされたものです。

信仰を第一義とする者に取つては、信仰心の上に於ける一切の行爲は、よしそれが一般通念の上から論議の餘地がありませんとも、問題とはならないのですが、それを一如の姿に見ずに、二段に區別して考へて居る人には一

聽其の人の考へて居る意を受けて、其の考へを一元化せねばなりません。それでなくては其の人の理解が困難になります。だから其の當時に於て其の人の抱いて居る思想の背景を考慮せずに高聲批評をしてはならぬと思ひます。

但しあなたの御議論には少しハッキリしない點があるかのやうに感じました。それは道德と宗教との關係に於てのことです。

唯だ宗教は道德を包含しますが、道德は宗教の全部でもなく宗教以外にも道德は獨立し得るものだからであります。例へば念佛心を以てなす盡忠報國は言ふまでもなく高度の宗教行爲の一ではあります。單に道德的の意味に於てなした盡忠報國は決して宗教行爲ではなく、純粹の道德行爲であります。若し假らば、宗教の必要もなく信仰と云ふことも私達にはいらなくなります。

若し假りに護國の神たり得る人が直ちに極樂往生の人であるとするならば、基督教の信

者も日蓮宗の人にもまた共に極樂往生の人なのでせうが、其の人の信念がさうでなかつた場合も、均しくその異つた信仰に於ても許されねばならなくなります。それを何う理解したらよいのでせうか。理論は兎に角としても、その人の感情の上から、何う見たらよいのでせうか。もう少し一般的に色々な信仰をも考慮に入れて見て頂かないと困るものが出来はしませんか。

然し部下に對してさう云ふ信仰を持たしめたあなたの場合は無論異論がありません。それで結構だと私も信じます。

因みに、忠實は法然上人の答に依つて、疑ひが晴れ、上人の御褒を頂いてそれを鑑の下にかけ、力戰奮闘いたしました。遂に刃が折れて深い疵を受けましたので、今はかう



よと覺悟して太刀を捨て、合掌念佛して敵に身をまかせ討死したと傳へられます。決定の信を以て討死した高僧

は確に往生の善報を遂げたこととせう。上人も「あはれ甘樹が往生しつるよ」と仰しやつたと云ふことです。

墓地と墓石の合併

問

私の郷里の墓所は全部土葬でありますが、私の家はかなり古いので墓地も四ヶ所になつて居ります。人の話に依ると、何ヶ所にも墓のあるのはよくないから之れを整理して一ヶ所に集め、祖父母以前のは先祖代々の墓と云ふ様にした方がよいとの事ですが、私は少年の頃から遠方に来て居住して居る身なので、私の子孫の代ともなれば、或は無縁となるおそれがないでもあります。整理すると云いますれば、古い石碑などは何うしたら宜しいのでせうか。また先祖代々の墓でも差支へないでせうか。猶ほ墓地は分家した兄弟の墓が一組になつて居て雜然として居りまして殆んど餘地が無いのです。御面倒ながら紙上で御

教示を願ひます。

答

(北海道・帯廣市、根本助治)
墓石に就いては色々迷信もあるやうですが、然し大體常識常識で差支へありません。奇をてらつたり豪華を誇つたりしない限り、必要に應じて墓地を直し墓石を整理することもいいと思ひます。貴家の場合の如き四ヶ所にもあるならば、お墓詣りをするにしても煩瑣ですし、一戸で數ヶ所を占領することも社會的見地から見てもよくないことです。御整理なさる必要があるやうに思ひます。但し御分家もおありのことですからよく御相談なすつて御分家の墓地は御分家のものとして分けておやりになり、尚ほ餘地が有りましたら、聖地管理者に其の旨を告げて墓地したらよいのでせう。また古い墓石はその場合一つにまとめて「先祖代々の墓」として法名は全部その側面にでも彫りつけ、不用になつた墓石は寺の無縁塔にでも納めて貰つたらよいと思ひます。(以下三九頁へ續く)



亡き母の

年まで生きて

竹 内 一

わが母はねむる
この墓の下に
とこしへに――

私は一つの困難に立ち向ふと、亡き母を想ふた。

母はわかくして逝つたけれど、私はそれゆえにこそ生きねばならなかつた。

今年、昭和十五年、皇紀二千六百年といふ

今年、私は遂に母が嘗て生きた命
数だけを生きた。

今迄どれだけの困難があつたことか、それをいまさら云ひ立てやうとは思はぬ。困難は困難である故にやり甲斐のある試練を興へるものであつた。私は寂しさはむしろ外にあつた。

甘へることの出来る母の居ないこと、また母とても甘へてくれる子供を十分に甘へさせるいとまもなく先立たねばならなかつたことは、どんなにか、お互にとつて辛く痛ましいおもひであつたらう。

父は、兄弟が友達のやうにザックバランに對手になつてくれた。殊に私が長ずるに従つて、その傾向は著しくなつた。父は小さい時、私に讀書の趣味を植へつけてくれた――爾來文學の趣味は遂に私の肉體の一部分となり、精神の樞軸となつた。

私は度々思つた。(自分が今日迄大した破綻がなく生きてこられたのはこの文學的な精神力の御蔭だ。)と。けれどもそれは表面的な私の思ひあかりに過ぎなかつた。

本當を云へば私は文學――殊に詩歌――の

情緒を通して母の情緒を求めてみたのだ。母への追慕——それだけに私は生きて来たと言つても過言ではなからう。私の今迄の文學的作品の大半には母が雛をのぞかせた。私も好んで亡き母、しかし私の中で未だ生きてゐる母の姿をのぞかせた。

母が生きてゐてくれたら、と思ふ。しかし母は全く死したのではない。母の分岐である自分が生きてゐるではないか。

子は親に似るなるものといふからは戀しきときは鏡をぞみる

私は鏡をみる必要がない。私の部屋は鏡だらけだ。灰色の壁、黒い机、天井、壁、部屋のすみ／＼まで私は私の鏡を持つてゐる。なんにもみなくても私には見える。靈魂者のやうに私は私の母をみるのだ。

母が生きた時代と私が生きた時代、この二つの時間的なビリオドは、時と所を異にして

みながらも、全く同じ性質のものであることを私は發見する。

私は、母の復讐をしてゐるのである。母は私のために豫習をしてくれた。そして漸く私は母の豫習してくれた真迄進りついた。これからの私は母の延長である。母を通して、母をのりこえ、私はぐん／＼と進まねばならぬ。

私は亡き母の年まで生きた。
亡き母は私の年まで生きた。

風はうれしい
まだ はが
白いハンケチをふつてゐる



何時の日からか、絶え間なく私の心の中でゆれるものがある。それは時計のセコンドのやうに正確に、しつこく迫り私の耳をうづつ。今迄にも、入學試験、就職試験、結婚といふやうな一生の重大事に至ると、そのセコンドは一層はげしくなる。

○ そのひびきは囁く程である。

私はめがくらみさうになりやつとふみ止まる。私は赤ん坊のやうに聲をあげてみたい。

私が、まだほんの一握りの肉塊であつたときにすら、母は限りなく優しい愛情をそそいでくれたのではないか。その人の靈魂に接したい。——私は一體何を考へてゐるのだらう。

いや何も考へてゐない。私は何も考へない。心の中心がかなへられないにきまつてゐるのそみの柱にたゞ一途に頼つて行くのは、なんにも考へないのと同じではないか。

さうだ。私は考へることは考へつくした。これからは考へることの内容をかへねばなら

ぬ。

母は私の中に生きてゐるけれど、私は母だけのものではない。遠く肇國の歴史をたどり、私の祖先が、どのやうに生きて來たか。

どのやうに生きてきたその結果として私が生れたのか。しからば私はどのやうにして生きるべきか。私は既に無限の中の一部であつた。

故に、私の考へることは無限にある。私のなすべきことは無限にある。

○

有限の生命を以て無限を考へ、無限なる事蹟の一端を窺ひし得てこそ人間としての價值があり、この世に生を受けた本當のよろこびがある。

母の命は有限であつた。

亡き母は私の年で死んだ。

私の命も有限であらう。

有限であることのよろこびはあだかも一日

が丁度よいときに暮れて行くやうに、丁度よいときに涅槃に入る法悦である。母の一日

はあまりに早くくれた。私はたゞそれが惜しい。

かなしみは、いつのときにも私の腕を通り抜け、頸のうしろあたりにそこはかとなく漂うてゐる。

私はこの、かなしみの雲氣から抜け出なければならぬ。かなしみに浸つてゐることはわるいことではないが、それは、かなしみのためのかなしみであつてはならない。嬰兒の、火のつく様な哭き聲が、やがては將來の大聲叱咤する力強い成長を約束されてゐる標に。

○

この、きれいな文章を一つのターニングポイントとして、私はふみ切つて行かう。

私は生きて來た——母の生きた年まで。

私は生きて行かう、母の向ふへ

母をふくめた私自身をとりまく一切のもの

の向ふへ。(筆者は東山中野校教師)

福田 勇登

てめつ見を己自

市 岡 長

吉 藤 森 大

長岡市の大森さんは、大きな縁物御座るの御主人で、何不自由のない御身分でございます。風に佛様に心を寄せられ、辨業上人を始め各宗の高僧方にも親交のある方で、特に念佛の信仰深き方でいらつしやいます。此の程左の一文を草せられて御心情

を吐露せられました。一言御紹介まで。(中村辨康)

私……生活……その周圍にだん／＼高く／＼寒き上げられた城壁の中に棲んでゐるので、虚偽の生活の毛皮の中に眞實の自身を閉ぢ込めて、自己の孤獨に涙ぐんでゐるのであります。此の孤獨は全く私自身の姿ではありまして、かくて私達の周圍を幾重にも取り巻いてゐる同情とか友愛とかの幕が、一枚一枚剝がれ落されます時に同情と理解とを求めないではゐられなくなりませんが、其の結果求むれば求むるほど、同情と理解とは私自身を見捨て去るばかりであります。私はかくの如くして斯様な虚偽生活の内に薄暗い孤獨のどん底に墜んでゐるのであります。たゞ／＼流れ出る血潮を吸つて舌を打つてゐるのでありますまい

か。かくまでに自分を欺いてまで、虚偽の毛皮を着て生きねばならぬ、悲愴な私自身を見詰めますと、大地にひれ伏して涙を流すのみであります。虚偽の死……何といふ可憐な姿であります。私達は此の虚偽の死に取りすがつてはゐる／＼と泣いてゐながらも、一方には此の冷え切つた死骸に白粉を施して恰も生々とした暖かい血の通ふた者の様に見せかけごま化してゐるのであります。そこには言ひ知れぬ悲哀があります。此の悲哀……低く地下に下りつゝ赤裸になつて冷え切つた永遠を抱擁して下さる如來、既に更生の道が何處にあるのでせうか？

苟くも理想生活に生きようとして道をたどれば、直接そこには苦惱の重荷があります。殊に眞實に生きようとすればするほど益々此の罪惡の事實に行き詰るのであります。即ち願ふた善は來らず望まない惡の姿をのみ見るのが、現實の苦惱となつて苦い盃を嘗めねばなりません。

是れが自己の分業した當職の職能であります。理想化の努力と現實の肉の愛着との此の二面の背反する兩性を自己の上に體驗する分業の儼みそのものゝ自己を見るのはかなしいことであります。

應に捨つべき罪惡の身でありながら去る所をも知らず、來るところをも知らず。唯だ勝つておごり敗れて泣きつゝ迷途に行くはかなきものであります。然しこの長い歩みの跡は別れし過去に饞けて、今日を個々の一瞬間として餘生を靜かに送らうと存じます。希くば向後善業を積みたまはず老の坂を眺くことなく有終の美を濟さしめられん事を切望いたします。

會のこと 會員のこと

今後の方針を協議し

積極的躍進を期す

理事會開かる

本會では今春以來鋭意整理中であつた事務その他について漸く一段落をつけるまでになり、更に今秋より本會所期の目的貫徹に向つて活躍することとなり、これが具體的實施方策を協議するため、九月二日午後二時より本會本部明照會館樓上に於て理事會を開催した。先づ會長里見達雄、理事長中村辨康兩氏の挨拶に始まり、主事佐藤賢順氏から協議事項につき夫

れん、説明をなし、質問應答並に種々なる意見開陳によつて熱心に協議が進められたが左記各事項を承認或ひは決定し、午後四時半散會した。御理事會に於て承認又は決定した事項は
昭和十四年度會計決算報告
昭和十五年前半期會計決算報告
昭和十四年度事業報告並に現況報告
會費増額の件

昭和十五年度下半期より實施すべき各種豫定の事業に關する件
會の發展並に會の目的遂行のための今後の方針に關する件
等で、何れも時局に關つて積極的躍進を期すべきであり、これがために會員諸氏の協力のもとに各事業を一層振作して、會の趣旨徹底と「淨土」建設に邁進すべきであるといふことに意見の一致をみた。因に當日出席の諸氏は左の通りである。

會長 里見達雄
理事長 中村辨康
理事 江藤滋英、木村玄俊、安井大學、杉浦演順、小橋謙瑞、福田有誠、藤本了泰、栗本俊道、赤尾光雄、稻田稔果
本部 主事佐藤賢順、淺瀬幸雄、辻重光、一瀬秀雄

法然上人を讃仰して

名古屋 川口 常念

法爾自然とよびたゝへ

圓き光を仰がれし

西へ誘ふ御おしへは

明るく照らし世をまもり

幾億萬年休まなく

東の空より出でまする

日輪様の如くにて

いと尊くぞおもほるる

衆生の正覺成就して

佛となるを見るまでは

捨て給はざる本誓を

顯はし給ふ御法こそ

我等末世のもの人の

救ひの船と仰ぐなり

されば行業はげみつゝ

大師の御徳たとへなん

單信口稱おこたらず

大師の御法たとへなん



(富眞は理事會出席の諸氏)

◇秋風や吾行く道に蟲の聲
貴會益々御榮昌且貴誌愈々内容

士道
士道
だにより

御充實の段まことに大法のため慶賀に存じます。尙刻下の紙價よりして貴誌の十二銭は餘り廉價に過ぎますべく、この際定價十五銭に値上げいたすのは餘りにも天下の適正價格のやうに存じますので、一言御挨拶まで、

(鹿兒島市易居町 奥善宏)

◇私は未だ會員ではありませんが誌上で會員倍加運動の記事を見ましたので、工場で黒々と汗ににじんで働いて居る友人達と一語に入会いたしたいと思ひます。何分宜しくお願ひいたします。

(大森區馬込 古谷嘉雄)

◇今回淨土宗讀本を拜見いたし、誠に結構なる書籍と存じますが、何故に佛式結婚につき言及いたさざりしや小納殘念に存じをります著者に御傳言下さい。

(大阪市此花區 豊岡宗嚴)

◇淨土宗讀本を手にして三師先生の熱心な事に感謝いたします。會員諸氏にも是非この感激をと、推奨する次第です。

(埼玉縣比企郡 杉浦文吉)

◇淨土宗讀本の全篇に渉つて著者三氏の熱誠と親切が溢れてゐて心地よい書物です。澤山の書籍を蔵してゐるものの、この本だけは座右に備へて毎日拜讀してゐます。全國の寺院住職は信念を培ふために先づこの本を熟讀することが肝要であります。

(山口縣玖珂郡 内田良弘)

◇別に希望としては御座るませんが、今までの婦人雜誌を斷讀して一宗徒として「淨土」を以て修養させて下さいませ。

(愛知縣東加茂郡 近藤生)

◇拙者齡五十を迎え、これを記念するため恩人に對し感謝の供養を

いたしたく、別紙二十七氏に「淨土(一ヶ年間)」をお送り下さい。

(大連市風龍臺 水谷一雄)

◇「淨土」はますます信解の滋味を加へて行きつゝあるの中心から脱んでゐます。中でも信仰隨筆が一番感銘します。又信仰相談を適當に編輯して單行本とするのも亦よいのではないでせうか。

(北海道野付手町 加藤芳治)

淨き友 信仰座談會案内

一、日時 十七日(神嘗祭) (十月分)
午後七時

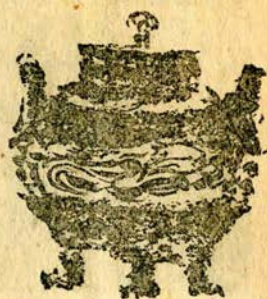
廿七日(第四日曜)
午後七時

一、場所 本郷白山上 橋本方
(電話小石川(86)四九七六)

一、講師 中村辨康先生

一、議題 選擇本願念佛集

淨き友の會幹事



夢も見せしめ酔ひもせしめ

般若心經講義(第九講)

中村 辨 康

(二二) 無所得の故に涅槃苦

提を得

菩提薩埵

依般若波羅密多故 心無罣礙無

罣礙故

無有恐怖 遠離一切顛倒夢想

究竟涅槃

三世諸佛依般若波羅密多故 得阿耨多羅三

藐三菩提

菩提薩埵は般若波羅密多に依るが故に、心に罣礙な

し。罣礙なきが故に恐怖あることなく、一切の顛倒せ
る夢想を遠離して涅槃を究竟す。

三世の諸佛もまた般若波羅密多に依るが故に、阿耨多
羅三藐三菩提を得玉ふ。

佛教の目的は涅槃と菩提とにあります。

「成佛する」と云ふことも「涅槃を證し、菩提を成ず」る

ことです。また「淨土」と云ふ世界は無量壽經の下巻に「無

爲自然にして泥洹(涅槃のこと)の道に次せり」とあり、

善導大師は「極樂無爲涅槃界」とか「三昧無爲即涅槃」な

どと云つて居ますやうに「涅槃」の世界であり、また淨土

に往生するものは「往生不退至菩提(中夜禮讚)であり」見

彼無生自然悟無生寶國永爲常」であり、また「永證無爲法

性身(日中禮讚)であつて「成就菩提」の人となるのであ

りますから、菩提の世界であることも明瞭です。
隨つて聖道門に説くところの生佛と淨土門に云ふところ

の往生淨土とは畢竟一體の二面觀であつて、一は人に就いて云ひ一は處に就いて言つたものとも見得られます。

淨土門と雖も般若を離れて居る譯ではありませんが、般若の眞空から更に一步妙有の世界に抜け出でて、むしろ般若そのものの實際的な活用を説くものが淨土教なのです。

然し今ま此の心經では般若の眞空を端的に強調するのですから、淨土門的な妙有の問題には觸れず、唯だ般若に依つて涅槃を證し菩提を成就すべきことを説かんとするもので、いよく心經としての最後の段階に近づかんとして居るのが此の一段であります。

(イ)

涅槃を究竟す

菩提薩埵依般若波羅密多故

菩提薩埵の菩提とは委しくは阿耨多羅三藐三菩提であつて「覺」と翻譯して居ます。即ち「覺醒」と云ふことです。

また薩埵は「感情を持つもの」即ち「人」のことで、此の二つの上の字だけを取つて一般に「菩薩」と云ひますが、日本語に翻譯すれば「覺醒を求むる人」と云ふことになりませう。

そしてその菩薩は般若の智に依つて何處までも覺醒を求め覺醒を目指して進むから「般若波羅密多に依る」と云つたのです。

心無罣礙、無罣礙故

罣礙は二字とも「障り」と云ふ字で、無所得になつて居れば、心が自由自在であるから何のひつかゝりもなく、随つて障りがないことは當然なことせう。

然るに私達の日常は一から十まで「有所得」のころでやつて居りますから、何れも之れも事毎にひつかゝりばかりで、それが爲に苦勞は一生絶えることがありません。よく世間には「私は苦勞性のものですから」と云ふ人がありますが、それは佛教的に云へば結局「有所得心」に依つて居るからです。そこへ行くと俗に云ふ太腹の人は、それだけ「有所得心」が少ないのであり、随つて苦勞も少ないわけであります。

菩薩は常に「覺」を目指して達觀に到達せんとして居ります。假りに心が捉はれることがありましても、すぐ反省して「無所得」の心呼び起します。即ち般若の智が本當の心と呼びさまして呉れるのです。有所得とは畢竟煩惱で

す。此の故に有所得を反省して「無所得心」になるところがつまり「菩提」と變化したのです。則ち「煩惱即菩提」であり、柿の澁がそのまゝに甘く變化したのであります。

無有恐怖

凡そ何事でも「無所得」の心になつて居れば、恐れがありません。然るに、私達は常に「有所得」の氣持で一杯です。すから色々に心を勞して、恐れなくともよいことにも恐れをいだくのです。随つて卑怯にもなり勝なのです。

私達の恐れの一番大きいものは「死」であります。死そのものは「生」を所得せんとする意欲の爲に恐れしめられて居るものです。然し一切を如來様まかせにして居れば、死もまたさう恐れるにもあたりません。如來様の方で適當の時期に適當に解決して下さるはずです。

遠離一切顛倒夢想

心に罣礙するところがなければ大自由が得られ、恐怖するところが無ければ大勇氣が得られるのは當然ですが、尙ほ吟味して云へばさう云ふ大自由とか大勇氣とか云ふものを若し私達が目指して修養して居るならば、それもまた

「有所得心」であり、顛倒心であり、夢想であると云はねばなりません。

「いろは」歌に云ふ「淺き夢見に酔ひもせず」と云ふのも、この「顛倒を離れ夢想を離れ」たる状態をさしたものです。私達は常に夢を見て居るのであり、物事を酔はされて居るのであります。凡ては「有所得心」になつて居るのです。功利主義になつて居るのです。随つて私達の心は常に顛倒して居るのです。一から十まで顛倒せる心を以て物事を見、物事を處理しようとして居るのです。

その顛倒心の大きなものは次ぎの四心であります。

一、常 何時までも有り得ると思つて居る心です。別けても大なるものは「死」を考へないことです。

「有る」と云ふことだけを考へて、その「有る」

ことそのことが、既に「死」であつて本當の「生」

でないことを知らないのです。畢竟私達の考へ

て居る「有」は「死有」であり「死藏」であつ

て、本當に生かしては居ないのに、何んでもか

んでも「かつ込み主義」で、英米の持てる國が

現状維持を主張して居る心境と均しい状態です。

二、樂

人生は樂しむべきものだと思つて居る心境です。有限の樂をのみ望んで、眞の樂に氣がつかないのです。官能的な樂のみを知つて永遠不滅の樂を知らないのです。然るに人生の事實は苦のみ多くして樂は少ないのです。少ないからこそ樂を望むのでもありませんが、その樂たるや、直ちに苦と變化する樂であつて本當の眞樂ではありません。畢竟「夢想」です。「酔つばらい」です。唯だ苦を増すばかりのものです。有つても苦、無くても苦、何一つとして本當の喜びはありませんのに、それを敢へて望んで居ります。身體の爲に悪いと知りながら酒をのみ煙草をのみ贅澤を望んで居る私達の實狀は誠になさけないほど愚かなものです。

身體も心も皆んな貰ひ集めに過ぎませんのに、それを「我」と思ひこんで固執して居る心境のことです。一切の顛倒心はこれから派生します。一切を我がものにせんとする所有欲は都合がよければよい程、増長します。ちつとも足ることを知りません。従つてこれから一切の葛藤

四、淨

が生じ、鬭争が起り、煩悶が生じ、苦惱が起ります。この「我」があるから「有所得心」も生ずるのです。だから此の心經の最初にある「五蘊皆空」と云ふことも畢竟「破我」を強調するものです。

自分丈はきれいだと思ひ込んで居る心です。他人はきたないが自分だけはきれいだと思つて居るのが私達です。早い話しが、自分のつばきはいきれいだ、人のつばきはいきれいだといふのです。

私達の生活事實は「無常」を「常」とし「苦」を「樂」とし「無我」を「我」とし「不淨」を「淨」として居る此の四つの顛倒心が基礎となつて色々の顛倒夢想を呼び起して居ります。

また此の反對に虛無主義に提らはれると、謂ゆる空見に墮ちて「無常」を知つて「眞常」を知らず「苦」を知つて「眞樂」を知らず「無我」を知つて「眞我」を知らず「不淨」を知つて「眞淨」を知らぬ「斷見」の人となつてしまひます。

それでも本ものではありません。謂ゆる「眞空妙有」の中道に處することが出来ないのです。

究竟涅槃

涅槃とは永遠の生命力のことです。永遠に「有る」と思ふのも眞生命でなく、むしろ「死」の存続にすぎませんが、その反對の「虚無」と考へて居るのもまた生命力を斷滅せしめることであつて正しいものではありません。

涅槃は梵語の宛字で「ニルバーナ」を涅槃とか泥洹とか涅槃那とか拈縛南とか云ふやうな字にあてたものです。が、言語學的には色々の義があると云はれて居ります。それで或は「吹き消されたること」即ち「滅」と譯したり「香」を放たざること、即ち「離臭穢」と譯したり「行かざること」即ち「不去不來」と譯したり「障りを離れたること」即ち「不覆」と譯したり其他色々ありますが、一般には滅、寂滅、滅度、寂等と漢譯して居ます。

「ニル」は「不」「無」「外に」「…を離れて」の義があり「バー」は「吹く」「香を放つ」「行く」「動く」等の義があり「ナ」は前の字を名詞にする後接字ださうです。だから滅とか寂とか不去不來とか離臭穢とか云ふやうな譯語がある譯です。

然し涅槃なる言葉は婆羅門教にもあり小乗教でも使用し

て居るので、それらの淺い意味のものと區別する爲に「般涅槃」又は「摩訶般涅槃」等と云つて「圓寂」又は「大圓寂」と翻譯して居ます。婆羅門や小乗教の消極的個人的心境を指して「涅槃」と言つて居るのに對して、大乘教では積極的に如來法身の無我的恒久的利他的原動力を指して居るので、謂ゆる「生死に住せず涅槃に住せざる」ところの眞涅槃を強調するわけです。

金光明最勝王經如來書量品には

「十法あり、能く如來の眞實の理趣を解し、究竟の大般涅槃あり」

と云つて次のやうな十義を出して居ます。

- 一、諸の煩惱障、所知障を斷盡する故に
- 二、衆生の無性、法の無性を解する故に
- 三、身依、法依を轉ずる故に
- 四、自然に化の因縁を休息する故に
- 五、平等法身を證得する故に
- 六、生死、涅槃の二性なきを了知する故に
- 七、一切法の根本を了し清淨を證する故に
- 八、一切法無生無滅に於て能く修行する故に
- 九、眞如法界實際平等に正智を得る故に

十、諸の法性、涅槃の性に於て無差別を得るが故に名づけて涅槃とす

と云つて居ります。畢竟菩薩の涅槃は般若波羅蜜多に依るもので、小乗教の聲聞緣覺等の證するものと違つて、究竟涅槃なることを説明して居るのです。

(口) 菩提を證得す

三世諸佛、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提

涅槃の境地はまた其人に取つては菩提と云ふ覺醒力を具せしめるものです。

菩提とは無限の進展力のことです。

然し菩提と云ふことにも聲聞の菩提、緣覺の菩提、佛の菩提との三種ありとし、聲聞や緣覺の消極的な「覺」に對して、積極的な正しい「覺醒」を區別しようとして「阿耨多羅三藐三菩提」と云つたのです。

「アヌツタラ」は「無上」「サンミヤク」は「正等」「サンボダイ」は「正覺」と譯します。略して「無上正覺」「正偏智」「等正覺」又は「正覺」と云ひます。

此の「菩提」を求めんとする「心」を「菩提心」と云ひ、其の人を「菩提薩埵」即ち菩薩と云ひ、菩提を完成した人を「阿耨多羅三藐三佛陀」略して「佛陀」即ち「覺者」と云ひます。菩薩は菩提心を發して六波羅蜜を修行し般若波羅蜜多を證得して成佛せんとするものです。

だから三世一切の佛は皆なこの「般若波羅蜜多」に依つて佛となられたので、この般若のことを「三世の覺母」であるとも申して居ります。

然し此の般若は「智」の一面のみを云つて居るのであつ

小橋麟瑞 監修・伊達幸太郎 毫揮

法然上人の聖像

竪一尺二寸 横一尺五分 原色千度刷
精巧高級品 價一葉五圓 (送料無料)

十年の苦心。鏤刻の結晶なる！
髣髴として上人に面接するの感あり

申込所 法然上人讃仰會

て「智」ははたらきの根元ではありますけれども、智の偏重は正しさを失ひます。

此の故に涅槃と菩提とは車の兩輪の如きものでありまして、自から偏はらねばなりません。

生死を超越した「涅槃」の生命力と、煩惱から脱け出た進展力の「菩提」とは二轉の妙果として成佛の必至條件となつて居ります。

それで「佛」としての性能を「一切知」と「一切能」とに分けて云つて居ますが、それはまた「無量光」と「無量壽」とに該當するものです。つまり「智慧」は「光り」を意味し、はたらきは「いのち」を意味して居るからです。

この「働き」を「命」と見るのは佛教獨特の見方であります。謂ゆる「正命」なるものが「正しい生活」を意味することを考へ合せますれば思ひ半に過ぎるものがあるでせう。

正しい働きこそは本當の「命」です。それは單に個人の命ばかりでなく、家の命であり、國の命であり、全人類の命なのです。國民の正しい働きなくして國家の進展もありません。國力の増進もありません。

それはまた永遠のいのちでもあります。一人の小さな働

きも、實には永遠に延び行く力であります。謂ゆる一念萬年でありまして、正しき一念は正しき萬年を引きのばす力をもつて居るわけです。

是れ即ち「無量壽」でなくて何でせう。

茲に般若を轉じて南無の一念に歸せしむる基礎があります。

繁瑣な聖道門の修行は轉じて茲に淨土門の端的直入の捷徑が示唆されるのであります。

自力門の道元禪師さへ

「唯だ我が身をも心をも放ち忘れて、佛の家に投げ入れて、佛の方より行はれて、之れに従ひもて行く時、力をも入れず心をも費さずして、生死を離れ佛となる」と云つて居ますが、こゝに到れば自力門も他力門も一つになつて居ります。

但し單に「佛」といふだけでは一切諸佛に通ずる普遍的な漠然としたものであつて、雲をつかむやうな感がないではありません。そこになると無量壽の阿彌陀と云はる佛に南無することに依つて、その漠然としたものも明瞭になるわけです。此故に「阿彌陀は諸佛の母」であることが判つて來るかと思ひます。

編輯後記

一人一人が確固たる信念の下に生きてゆければ、それが即ち全體として強固に活動に躍動することになります。

◇爽々しい大空をジツとみつめてみると、五尺の身體が飛び立つて、無限の世界に融け込んでゆくやうな氣持になります。そして又この無限の世界から降り注いでゐる光りを身體一杯に受け取つて小さな心が自然とふくらんで遂には空一面に擴つてゆくやうでもあります。

◇詩いた種からは無數の實がみのつて、取り入れに忙しい氣節です。本會でも過去五年數ヶ月に亘る會員各位の御後援を基礎として更に第二段の發展を目指して邁進することになりました。

◇本會では時局に鑑み、何うしても法然上人の徹底せる御教へを普く擴めなければならぬ熱情にかられてゐます。お念佛によつて一

を成るべくそのまゝ讀者に傳へるやうに精進されてゐます。又字句その他について經典と違つたりせぬやう充分研究されてから御執筆下さつてゐます。

◇山口察常博士は今度北京大学教授に招かれ渡支されましたが、種々御多用を極めてゐる中から久し振りに玉稿をお寄せ下され、厚く謝意を表します。又折角御奮闘あらんことを祈ります。

◇佐藤密雄氏は鎌倉大佛で有名な高德院におられる方で、それだけ「大佛雜誌」は興味多いものです。同氏は又「大佛さまにお詣りするのてなくて、見物に來る人があつていけない」と申されてゐました。

◇庶務、會計兩部から會員各位に色々質問合せやお願ひの書面をさしあげてゐますが、御手数ながら何卒本會御指導の立場から宜しくお願ひいたします。

◇佐藤春夫先生は都合により一回休ませていただきました、先生の「阿彌陀さま」は先生の頭の中に現に觀られてゐる佛様で、これ

淨土 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五年九月三日印刷納本
昭和五年十月一日發行
(定價十二錢)

編輯人 眞野 正順

東京市芝區芝公園五號地一〇
發行人 眞野 正順
東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一〇二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

◎ (送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ケ年 (送料不要)

大正大學 教授 大野法道 前淨土宗 教學部長 中村辨康 關西大學 教授 前田聽瑞三師共著

淨土宗讀本

しつかりした信仰へ！ 本書の示す道をたどつて！

いままでにこれ程長く纏つた佛教讀本はどこからも出たことがありません。だから、本書が一度現はれるや絶對的な好評をまき起したのは當然です。むづかしい原典によらばとも、これだけで淨土信仰に必要なものがすつかり解ります。行文もまた流麗、わかり易く説かれてあります。

絶對的好評・三版出來！

満洲・支那・米國はおろか、前線からも注文が殺到しております。そして讀んだ人がすべて惜しみなく讃辭をよせられてゐます。

菊判四五〇頁・總クロース装
本文五號バラルビ
挿繪寫眞人
定價二圓五十錢
送料二十一錢
(朝鮮・臺灣・滿洲等 四九錢)

★會員一割引の特點は八月限りです。

★代金引かへの申込みは一切お断りしております。

★廉價でお捌ちしてゐるのですから送料をお忘れなく。

法然上人
鑽仰會

東京市芝區芝公園十五號
振替東京八二一八七

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十五年九月廿日印刷納本 昭和十五年十月一日發行

淨土 第六卷 第十號

(傳)

定價 金十二錢(送料五厘)
外埠定價 金十三錢